

昭和十三年五月廿日第三種郵便物認可（毎月二回二日發行）
昭和十三年四月廿日印刷納本 昭和十三年五月一日發行

第四卷 第五號

淨土



五月號

好評嘖々たる高級布教用書！

講話 一枚起請文

四六判・七〇頁

誰にも読める總ふり假名付

美麗表紙付

定價十三錢（送料共）

勅修御傳第四十に『上人の終焉の期近づきたまひて勢觀房、念佛の安心年來の御教訓に預ると云へどもなほ御自筆の御所存一ふであそばされて、のちの御かたみにそなへ侍らんと申されたりければ、御筆をそめられける狀に云く』としてこの一枚起請文が載せられてあります。浄土宗の教義信念悉くこの一文にこもるものとして信徒は朝夕これを誦してゐます。この簡單流麗な御一文に中に籠る浄土宗の教義と信仰の精髓を著者の豊富な體驗と該博な知識に基いて、易しく詳はしく説いたものが本書であつて、この御一文に毎日接してをられる信仰厚い方々は勿論、信仰を求めてをられる方々にも、極めて素直で有益な手引きになるであります。發行以來非常な好評で布教用書、教化用書として飛ぶ様な賣行きです。

發行所

法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館

一時に十部以上購入の方には一部九錢、送料不要

振替東京八二一八七番

文學博士 常盤大定序 平井巽著 (最新刊)

菊判四〇〇頁・總布裝函入
定價二圓五十錢・送料十四錢

指導原理としての佛敎學

切實な人生問題に對する佛敎學的解答！
社會生活の指導原理は斯くして佛敎の中に求めらる！！

現代の佛敎はこう云ふ風に説かねばならない。佛敎が一切の現象、人生、社會の裡に生き動いてゐる事を示して、犇々と讀者に迫るものがある。萬人が望んで得ざりし未見の境地が本書によつて明確に地歩を得た。恐く本書は今後の佛敎學界に劃期的な役割をもつものと云へやう。

……内容大綱……(廿二講壹百二項)

- 序、人生を思索する
- 一、理想主義的人生觀
- 二、哲學と宗教と人生
- 三、生命充實の根本原理
- 四、諸法實相としての無我
- 五、幸福原理としての無我
- 六、道德原理としての無我
- 七、辨證法的實踐論
- 八、煩悶解決の論理的根據
- 九、唯物論と唯心論の問題
- 一〇、完全人としての教養
- 一一、教育と宗教と人材育成

- 一二、指導者への指導原理
- 一三、佛敎の社會事業概觀
- 一四、政治と宗教と中道
- 一五、經濟の道德宗教化
- 一六、理想社會の八大典型
- 一七、科學の使命と宗教の立場
- 一八、迷信の奇蹟解剖と最高宗教
- 一九、信仰の論理と正信の基準
- 二〇、道德と法律と宗教
- 二一、藝術の世界と宗教の世界
- 二二、寂びと滋味の藝術

文學博士 宇野圓空著 (四六判二九〇頁)
(二圓廿錢送料十錢)

佛敎が要求する

宗教生活

久しく品切れの所△△△

増補改訂版發行

- 一、序説
- 二、宗教と宗教生活
- 三、佛敎思想大意
- 四、佛敎の史的展開
- 五、佛敎上の諸特徴
- 六、宗教的慾求と理想
- 七、佛敎的生活
- 八、成佛と信念の意義
- 九、宗教的行動の分化
- 一〇、表現としての祭祀
- 一一、禪定と念佛、回向
- 一二、佛敎道德と世俗生活
- 一三、教團の意義
- 一四、學解と生活態度
- 一五、信仰の合理化
- 一六、全生活の佛敎化
- 一七、社會國家の生活

大東出版

發行所

東京芝公園一丁目九番四ノ七
電話 四四九三
芝公園一丁目九番四ノ七
電話 四四九三



◇ 浄土 第四卷 第五號 五月號 目次 ◇

表紙……………井上正春
扉繪……………鈴木金平

この時に臨んで 佐藤春夫

差し伸べられた御手……………佐藤賢順……………(四)

聲の念佛……………中野尅子……………(四)

晩春懺悔……………吉田絃二郎……………(六)

名將物語 不動明王……………小島健三……………(三)

七ツ坊經由來……………池田英淳……………(六)

國際事情解説……………中田一郎……………(四)

信仰相談……………中村辨康……………(五)

出征美談 村の模範青年……………鶴田湛泉……………(四)



短歌誦する心經（現地より）……………白崎嚴成（四）

家庭と婦人

信仰への道……………和田正策（四）
衛戍病院を訪ねて……………渡邊暎子（五）
國家總動員と婦人……………高梨花子（四）

講談出世高虎（大羽四郎畫）……………一龍齋貞丈（六）

長編小説血しぶきの法將（鈴木金平畫）……………飯田光明（八）

歌壇……………與謝野晶子（三）
 俳壇……………太田耳動子（五）

漫畫のんきな釣師……………大羽比羅夫（六）
 一頁評論増税の話……………（九）

法語解説
人格向上への信仰……………中村辨康（六）

鑽仰運動ニュース……………（六）
 編輯部だより……………（四）

◇浄土（第四卷第五號）五月號目次◇

改増
訂
版補

信仰讀本

錢三十二 價定 頁〇八版六四 著康辨村中
付名假りふ總

邪教の迷夢より醒めよ！ 信仰を
正しい軌道の上に！

邪教が跋扈するのは民衆生活の深刻化を物語るものであるが、同時にそれは正しい信仰の光が遮られてゐることを示してゐる。凡ての迷夢から己れを解放し、生活を確立するために己れの信仰を正しい軌道の上にのせなければならない。
今回法然上人鑽仰會は信仰を求めて、しかも良師を得ざる人々のために、この名著の増補改訂版を出版し、正しく、力強い信仰への扉を開く。『浄土』誌上の著者の名講義の愛讀者は是非一讀せねばならない名篇である。

内 容

- 第一章 悟りと救ひ
- 第二章 宗教と人間の望み
- 第三章 信仰する心持
- 第四章 信仰の本尊
- 第五章 信仰を得る迄

法然上人

大正大野法道著 四六判定 價拾八錢
學教授 七〇頁 送料共
法然上人に關する文獻は古來少しとしなかつたが、いづれも難解に過ぎるか、浩瀚に失するが、萬人に適する文字を得なかつた恨みがある。篤學の著者が研磨してものしたるこの簡潔にして要を得たる一本は讀者をして直接上人に接するの思ひあらしめ、その端々たる餘韻は讀む者を法悦の彼方にひき込まずにはおかぬ。

◆ 會 仰 鑽 人 上 然 法 所 行 發 ◆

淨土

五月號

阿彌陀佛と心は西に
うつせみの
もぬけはてたる
聲ぞすゞしき

法然上人御詠





この時に臨んで

佐藤春夫

自分の生命を愛することや、その同じ心を他に移して同類一般の生命を尊重することは、格別人間らしいえらい事ではない。多少複雑なものと單純なものと區別位はあらうが、あらゆる動物に皆な共通したものであらう。一般の動物でさへ持つてゐる氣持だから人間がそれを持たないでは人として恥しいのは申すに及ばないが、それを人間らしい特別なもののやうに尊重してヒューマニズムなどと名づけてゐるのは、人間を神の恩寵で特に造られたと自惚れてゐる西歐のキリスト教徒に相應な間違ひではあるまいか。

それでは眞に人間らしい事、我々の覺るべきヒューマニズムは何か。動物共通の自分の生命の尊重などといふ本能から脱れて、人間でなければ持つことの出来ない知慧によつて認められた理想に奉仕してそのためには生命やその他の慾望を超越するといふ事こそ、眞に人間でない他の動物には決して出来ない。それ故に眞に人間らしいものではあるまいか。知慧によつて煩惱を征服しようといふ佛教にしろ、その哲理がわが國民性と時代色とに映じて出来た武士道にしろ東洋人の思想や行動のなかには西洋人の知らない、全く別なヒューマニズムがある。彼は飽くまでの生命の尊重であるのに此は生命の否定といふ深い虚無から出發し、それ故自他の差別や、



部分と全體との煩はしい考へ方を撤廢した尊い混亂から生れ出た思想である。西洋流の感じ方考へ方ではちよつと呑み込みにくい思想である。これは理論で出来たのではなく體驗、即ち行動に伴つて生れた知性によつて悟られたものだからである。念佛の教へも亦、理論を超越して行動によつて行動に伴ふ知性を體得するといふのにあらうか。

あらゆる感じ方考へ方が西洋流になつて東洋風が忘れられようとしてゐる今日、偶然か必然か今度の事變の出現を見た。この時に當つて多くの勇士は東洋平和といふ、新しいアジアの誕生といふ理想のために欣然と生命を賭したのは正に東洋風の人間主義を行動によつて現出したものである。この時に臨んで我々が、東洋の人間主義、自分の言ふ、理想のために自己の生死を超越して別に永劫の生命を得るといふ生き方——今日の合ひ言葉で言ふ奉公滅私の精神を國民全體が十分に會得することが出来たら今度の事がたゞ政治的に新しいアジアを出現するだけではなく精神的にも新しいアジアを生む事になるであらう。莫大な犠牲に對して我等は必ずこの自覺をしつかり得なければ相濟まない。個々の生命や慾望感情などは一切放擲して理想のためにだけ生きるといふ覺悟、これだけが本當の人間らしい生き方であるといふ信條を、すくなくも日本全體に行きわたらせたいものである。かくてこそ「光は東方より」であらう。この時局に際して佛教の指導者が民衆に教へるべきところは、恐らくこの邊にあるのではなからうか。民族がこの自覺に生きることさへ出来るなら、敢て百萬の生命を惜しむに足りないのである。それを犬死にさせると否とは眞に我等生き残つてゐるものの覺悟一つである。

差し伸べられた御手

續「犬・猫・人間・佛」

佐藤 賢順

毯を陽の光に當てて見ると、半面は明るい陽に照らされるが、他の半面は影になる。そして明るい半面には、一番明るく陽の照つてゐる所があるし、影になつてゐる暗い半面には、少しも陽の光の届かない最も暗い所がある。そして暗い所から明るい所へと明るさを求めてゆくと、恰も眞夜中が眞晝になつてゆくやうに、段々に明るさを増してゆく。その丁度中間には、黄昏のやうに、明暗相半ばした帯がある。

若し圓かなる悟といふもの、眞如といふもの、智慧といふものを、このやうな毯で表はしてもよいとすれば、それはこのやうに明と暗との兩面を備へたものとも言へよう。消極的な否定的な部分と（つまり暗い所と）、積極的な肯定的な部分と（つまり明るい所と）、その二つを備へてゐる。一方から見ればそれは消極的な冷たい影の部分と見えるが、他の一方から見ればそれは明るい陽の當る暖い部分である。實はそれは一つ物である。暗い部分とは空

とか無我とかいふ言葉で表はされた所、明るい部分とは佛性とかこれから述べようとする佛とか如来とかいふ言葉で表はされる部分である。明暗相半ばする部分は、縁起といふ言葉で表はされる所に相當すると言つてもよいであらうか。これが前回までに述べてきた事柄の要旨である。

さて佛性とは生きとし生ける者の依つて立つ所の、共通の座であつた。誰の佛性、彼の佛性といふやうに、それは個別的な占有からは離れてゐるが、共通に誰にでも豫想されてゐるもので、誰もそれなしには生きることができない。それは誰れ彼れと限られた人のものではないといふ點では、無であつたが、それを豫想せずしては誰も生きられない、總べての人間が等しくそれに與ることができるといふ點では、それは有であつた。恰も空氣が光のやうに——。それが一切衆生悉有佛性である。

然し、佛性といふ共通の座は人間のみに限つたことではなくて、佛敎のずつと進んだ考へ方によれば、色心不二（物質的存在も精神的存在も元來は一つものである）といふ見地から、草木國土あらゆる存在には佛性が豫定せられてゐるのである。これが草木國土悉皆成佛である。石や草に精神を見、何等か生き生きとした生命を見ることは、この考へ方に深く訓練せられた東洋思想の特徴とも言へよう。

試みに芥子園畫傳の「芥子園畫傳」を披いてみよう。「芥子園畫傳」は東洋畫の精神を傳へ、眞の畫技を教へる畫道の聖典とも言ふべきものであるが、その「石法」——即ち石を描く要諦を教へた所には次のやうな言葉が見えてゐる。

「石は天地の骨である。従つて氣も亦これに寓してゐる。人間に氣骨といふことを言ふが、石にも氣と骨がある。氣のない石を描けばこれは則ち頑石である。恰も氣のない骨、則ち朽骨の如きものである。無氣の石を描く可らず、須く有氣の石を描く可し。……石を描く秘法は別段數多くあるわけではない。一字金針、以て相告ぐれば、曰く活」。

このやうに生きてゐる石を描くことを石法の要諦とした位であるから、樹を描くに老樹と幼樹とを配してか或は負老とか、或は搬幼とか教へて、

「老樹は須く婆娑として多情たるべく、幼樹は須く竊窈として有致たるべし。人の聚り立つが如く、互に相顧眄す」と示したのは當然と言ふべきである。石も樹も鳥も獸も人も、一切が大調和の中にあつて、脈々と波打つ生命を共にしてゐる。

然しひととは一度退いて靜かに反省しなければならぬ——果して又如何にして自らはこの大調和の中に參入することができるとあらうかと。佛性といふ貴き可能性を現實性として體得するといふことを、實際に差し迫つた問題として取り上げてみなければならぬ。自分自らの力でそれを開闢するなどといふ自信は恐らく誰にも有りさうには考へられない。そんな身の程を忘れた倨傲と尊大をけろりと忘れてゐるといふことが、却つて近代人の特色ではないのか。身に科せられた桎梏を、かなぐり捨てる力もなく、これを一種の宿命として、これに泥んでゆくことの方が、私達には多いのではないか。佛性の開闢などといふことは、遠い世界の夢物語りとししか響かない。子供はお伽の國の王様になれると、半ば本氣に考へてゐるであらうが、佛性の夢物語りは、私達にはそれ程の魅惑さへもない。もしさうだとすれば、如何にすべきか。

茲で私は「一闢提よ、何處へ行く？」と問を改めてみる。一闢提とは極惡人のことで、昔から斷善根とも信不具足とも極欲とも譯されてゐて、目の無い者、生き盲などに譬へられてゐる。著にも棒にも懸らない者、酢でも蕪蕪でも食へない者のことである。四重禁を犯せる者、お經を謗れる者、五逆罪を作つた者と並び擧げられてゐる場合もあるし、かういふ惡人を一闢提と呼んでゐることもある。惡の華の咲き競ふ人生のどん底に墜いて、ありとあらゆる罪の數々を累ねて、社會に對しては執拗な敵意と反感を抱く宿命的な氣の毒な人々こそ一闢提である。これらの人々は何處へ行くであらうか。

佛性論を説く涅槃經では、初めは一闍提は成佛の可能から除外されてゐて、それぞれ宿命づけられた欄の中をさ迷ひ歩かねばならぬものとされてゐた。然しそれでは、一切衆生悉有佛性の論理と反するところから、後半に於いては、一闍提も亦佛性ありとして、但しその有るといふ意味を、「未來に有するを以つての故に」といふ生溫い解釋で片着けて兎も角も一應はこの問題を糊塗したのであつた。然しそれが問題の解決でないことは言ふまでもない。

ところで、靜かに反省してみれば、私達と一闍提との間にはどれ程の隔りがあらうか。人間の現實の相を正しく認識すれば、私達と一闍提との間は紙一重だといふ事實に、ひとは戰慄するであらう。場合によつては、その紙一重の境をも超えて、彼等と並んで歩いてゐることもあらう。若しもその紙一重の境が保たれてゐるとすれば、それは「何時如何なる場合に、それ程に恐ろしい數の罪を犯さないとも限らない」といふ、私達にとつては罪が可能態の姿に於いて、未だ犯されずにあるといふだけの異りに過ぎない。この恐るべき不安を切實に感得されて、新たな姿に於いて、人間の現實相を赤裸々に、眺められた最初の天才は、法然上人であらせられた。私達とは雪と墨ほども違ふ清淨にして堅固な日常を営まれた上人にして、なほ且つ御自身は、「十惡の法然房、愚癡の法然房が、念佛して往生せんといふなり」との人間認識に到達なされたのである。「十惡五逆の衆生」と言はれたからとて、

勿論上人がそれほど數々の罪を犯されたといふのではない。それは如何なる機縁で如何なる罪をも犯し兼ねないとも斷言できぬといふ果さの自覺である。まして私達と極惡人との間には紙一重ほどの隔りもないことを三省すべきである。

人間は空間に於いて遍在することができない、たゞ皮膚によつて外界と限られた有限的な存在である上に、時間にも於いても永生することのできない、たゞ數十年の生命をしか保つことのできない有限的な存在であることに就いては、既に述べた。またその上に、道德的には今述べたやうな制限がある。人間の心の働き方を、意慾的、情緒的、思维的と分けて、その表れは行爲、同情、知識といふ部分に分けられるとすれば、そのうちのどの一つを取つてみても、人間の働きはほんの僅の範圍をしか持つてはゐない。行爲の上から言へば「十惡五逆の衆生」であるし、同情の上から言へば愛憎常なき凡夫であるし、知識の上から行へば「一文不知の輩」であり「愚痴の法然房」である。寔にパスカルの行ふ通り「人間は考へる輩」である。(知識の事に就いては曾て再説したので茲では省略する)。これらの色々の働きに於いて、人間の眞の姿を把へた時に、諸の有限性、制限は果なき、頼りなき、不安として深刻に體驗される。「智慧の眼盲ひ、行法の足なへたる此の頃の吾等」としての眞實の自覺こそこれに外ならない。

陽の光りに照らされてゐる毬に譬へて、その影の部分から明るい部分へと、段々と夜が白むやうに、明るさと暖かさを追ひ求めてきた。これを私達が佛として、如來としてお受取りする時、陽の直射する毬の最も明るく、暖い部分に觸れることができるのである。そこには否定の道を通る時に、屢々遭遇したやうな暮れかゝる山寺の寂しさもなく、晩秋の溪谷の底知れぬ冷さもない。遅々として歩まざる春日があるだけである。

それを如來として受取るとき、私達は自らの力にのみ頼らうとする淺果なる望に見限りをつけて、そのお力に乗つてゐることに氣付くのである。氣付いてみれば、如來のみ手はもうとうから私達にさし伸べられてゐた。恰も空が一切の物の眞の相であり、ただ一しかない説明の原理であつた如く、また、佛性が凡ての存在の豫想された共通の地盤であつた如く、如來のみ手は大慈悲心としてどの世界の隅々へまでも差し伸べられてゐる。一切のものは皆その暖い手で生かされてゐることに氣付くのである。

この救ひの御手とは本願の力に外ならない。本願には色々神話的な説明があらう。無量壽經の説く所によれば、その昔、錠光佛が世に出られて數限りない多くの人々を救ひ給うてより以來、五十三の佛が出で給うた。そして最後に世自在王佛と申す佛が出興なされた時、國王はこの佛に深く歸依なされて、出家して法藏比丘と名乗つた。法藏比丘は世自在王佛の御許に至つて、

「世尊よ、私は眞の悟りを得たいと願つてをります。清らかなる佛の國を建て、生死に浮き沈みする人々を救ひたいと思ひます。どうぞ法をお説き下さい。」と願つた。

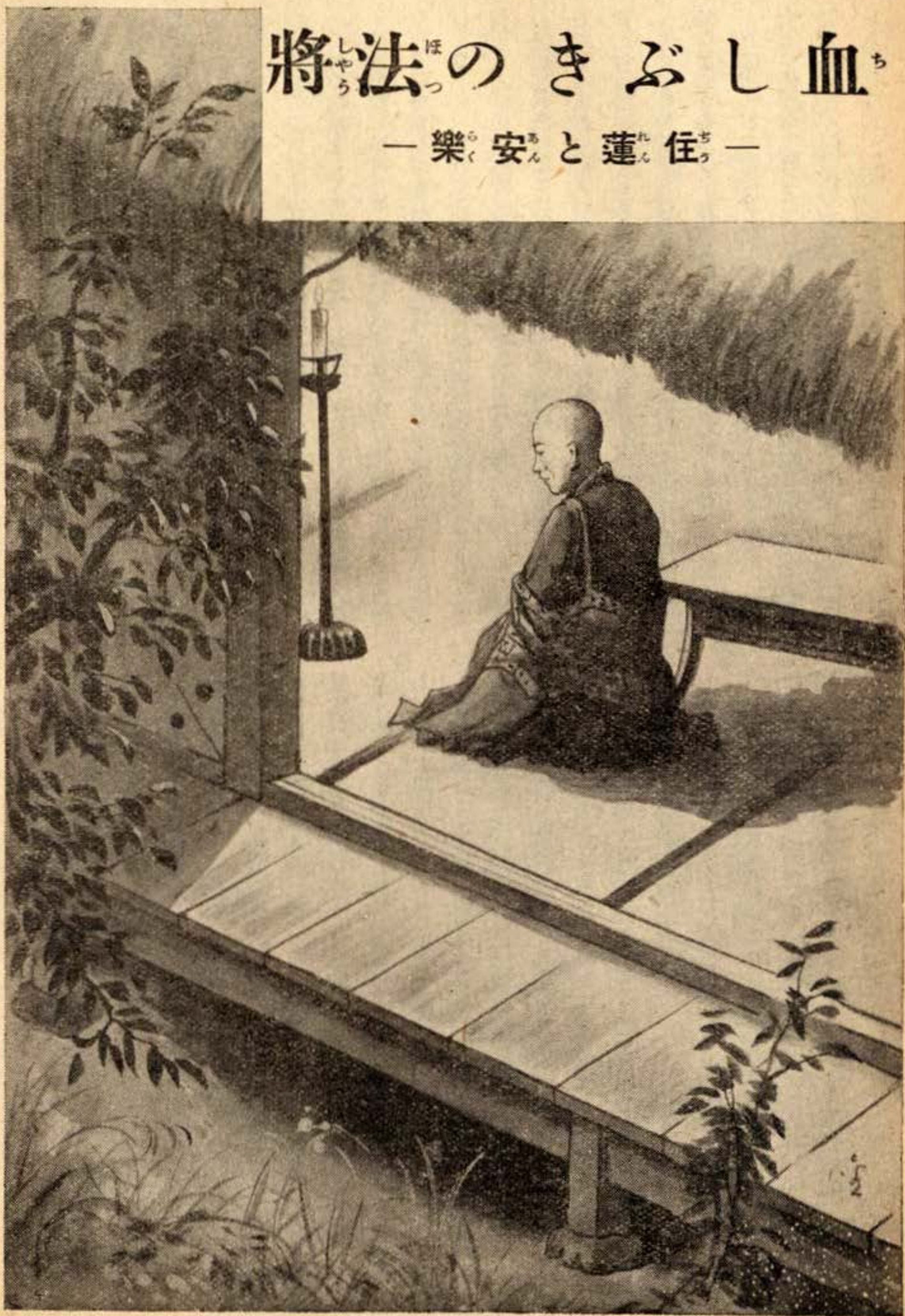
世自在王佛は、法藏比丘の爲に二百十一億の佛土の、細い異りを説き示されたので、比丘はそれらの國々と、その國々を建てる修行に就いて、五劫の長きに亘つて、思惟を凝らし、それらの國々の善い所を悉く攝め取つて、再び世自在王佛の所に至つて、世に超えた四十八の誓願をなされた。これが衆生濟度の本願であり、比丘はこの本願を成就して阿彌陀佛とならせ給うて今現に在し給ふ。本願に就いての物語はかう語られてゐる。

それは餘りに古典的な物語である故に、却つて私達には信じ難く、本願力には遠い所に働きかける力と考へられ勝ちなことさへあるが、如何なる神話的な、また藝術的な表現がなされてゐやうと、その眞の意味は、如來と衆生との根本的な結びつきといふことに外ならない。有限者が無限者に興る道はこの結びつきを措いては外に求められないのである。

人間は佛になれるかといふ疑ひは、こゝですつかり解けてしまつた筈である。極悪人は佛になれるかといふ問題さへも、問題ではなくなつてしまつた。といふのは、大慈大悲のみ手の前には善人も惡人も區別はない筈であらうから。「お導きのまゝに」——ただそれが凡である。(終)

將^{しやう}法^{ほつ}の き ぶ し 血^ち

— 樂^{らく}安^{あん} と 蓮^{れん}佐^さ —



飯田光明

鈴木金平畫

一、幻の慈影

秋が立つたとはいふものの、雨雲の氣配は更になく、焼けつくやうな暑い日が四五日も續いた。

若い法師達の一群は、今日も御堂裏の廣場へ集まつて、寄々に論を吐いてゐる。白衣の上に羽織つた衣も名ばかり、そのまゝ地肌に腹這つたり、毛深い胸もあらはに諸肌をぬいだり、中には大玉の珠敷をしやり／＼と揉みながら、口角泡を飛ばしてゐる者もある。時は元久二年九月のはじめ、所は南都の興福寺。

氣の早い衆徒達は、手に／＼得物を持ち具して、陽が燦々と降る中を右往左往してゐて、今にも京へ暴れ込まんず勢だつた。

「笠置の解脱上人、萬が一、我々の乞を容れられん時には？」

「いふまでもない！ 直々に京へ押しかけるまでぢや！」

「専修念佛の輩は、誓ひを反古にし居るのぢや！」

「諸行無價值など、臆面もなく布れ歩いて居るでないか。愚弄にも程を缺き、無價值とは何だ！ 摩訶止觀を、死觀、ぢやと書き、三學も無用と吐き居る！」

「論議こそ無用。斷々乎、邪教念佛宗を蕪るにしかず！」
騒ぎ立つ法師達を、

「靜かに、靜かに！」

骨格の逞ましい主だつた法師が、兩手を擲げて制しながら言つた。

「餘宗誹謗もさることながら、愚僧はさき頃、確にこの耳で聞いて來たのぢや。この目でも見てまゐつたのぢや」

法師はぢろりと一瞥して、

「御一同」と改まつてから、

「彌陀の本願といふのはまことに都合のよいものぢやぞ。菩提心も要らぬ、肉食も可、女犯も碍けぬと言ひ居る。他力本願に任せたり」といひふらして、晝日なか、酒を食らひ、女に戯れ、踊々と街を歩いて居るのぢや。人非人の亂行、不義密通も一向に念佛すれば彌陀の本願に救はれると申し居る」

「邪教！」

「また此頃は、一念往生の義とかの口實をもうけて、念佛は一念こそいみじくも尊い」と説き、念佛の念といふ字は、人二人が心と記す。依つて一念といふのは、人二人が心をひとつに合すのだ」と解すばかりか、言語道斷なことには、男と女の二人が寄り合つて、双方二人がこゝろ面白いときに、一度にたゞ一こそ、南無阿彌陀佛と申すべし」など、里人にすゝめて、娘、人妻のきらひもなう彌陀本願の絶體を證する。籠を垂れる」など、説き伏せて誘ひの魔手をのべて

るといふ！」

「佛意を翻る輩！」「邪教！」「羈れ！」

どつとぞわめき立つた一群の法師達は、「雪崩こめ！」

口々に「雪崩込め！」と云ひ合ひ、ひしめいて、容易に静まりさう

もなかつた。がこのとき、颯立ちとつた旅装の法師が三人、塵に塗れ

ながら駈けて來た。

期せずして法師達の眼は旅装の三名に注がれた。

「乗蓮の御房！」「おゝ、願空どの！」「成否は？」「笠置の上人は

何と申される？」「御承引下されたか？」

何十もの聲が一樣にうわずつて動揺し、乗蓮房願空ほか二人の使者

を、忽ち幾重にもとり圍んでしまった。

昨日の晝すぎ、興福寺一山の衆徒はもとより、南都の荒くれた法師

達は、この御堂裏に集まつて、念佛停止の訴を議決したのだつた。

そして上奏文草者の白矢を、笠置の解脱房貞慶に立てゝ、即座に願空

以下の二人が使者に發つて行つた居のである。

やがて願空は推されるまゝに、太く茂つた松の根元の岩上に立つて、

聲高く訴文を讀んでゐた。九ヶ條の訴狀全文を朗讀してから、一段

と聲を強めて、「恐懼して敢て禁裏に訴申し上る」と讀み終つた

き、法師達は我が意を得たりとばかり、どつと賊の聲をあげた。

騒ぎは、程經て吉水の禪房へ傳はつた。

前篇の梗概

粟津ヶ原の敗戦に深傷を負うた伊勢の治郎左衛門信國は、土地の豪族、青木庄左衛門の館で、手厚い看護を受けた。青木の娘更科の美しさに戀心を燃したのだつたが、更の小御所に宮仕へに上て行つて仕舞つた。戀にも敗れ彼は母を戀つて六波羅に行く。六波羅の家ではからずも未だ見たこともなかつた父の實通（興福寺の僧綱）と遭ひ、既に信仰を求めて來てゐた信國は名も住蓮と改めて出家した。それから五年後の文治五年四月道を求めて法然上人の門を叩いた。彼は數多い同門の中から安樂房蓮西と二人で鹿ヶ谷に貧しい庵を結んで、本願依存、専修口稱の熱烈な談義を街の辻々にくりひろげ、老若男女の歸依は日毎に増して行つた。——或る秋の夜草庵を訪ねて來た女は住蓮が曾て戀した更科であつた。然し修業途上の住蓮は更科の乞を容れる餘裕がなかつた。——一方南都北嶺からは淨土一門に對する迫害が日に増しつのであつたが、二僧は少しも屈せず大膽な談義を續けた。元久元年十一月遂ひに叡山三塔の衆徒は専修念佛の停止を決議して騒ぎ立つたが、その中であつて誰はゞからず二僧の談義が大恩寺の焼跡で夜毎に續けられた。



居合せた善慧房證空をはじめ、法蓮房徹空、定生房感聖、その他教光房、唯願房など、十餘名の弟子達は、倉皇として、注進に八方へ散つて行つた。

遅れ馳せに住蓮が駆けつけて来たときには、陽がもう西に傾いてゐて、室内は淡闇に閉され、並みゐる人々の顔も仄かな墨にぬられてゐた。灯一つ、けずに憂ひの面を集めてゐるのだつた。

「なに談議を止めよと言はれるか」

こゑには微かな震へがある。あ、遵西だ、安樂の房だ——住蓮は安樂房の一徹さをよく知つてゐるので、何を言ひ出すかと呼吸をのんで立ち止つた。

「さう、むきになられては困ります」

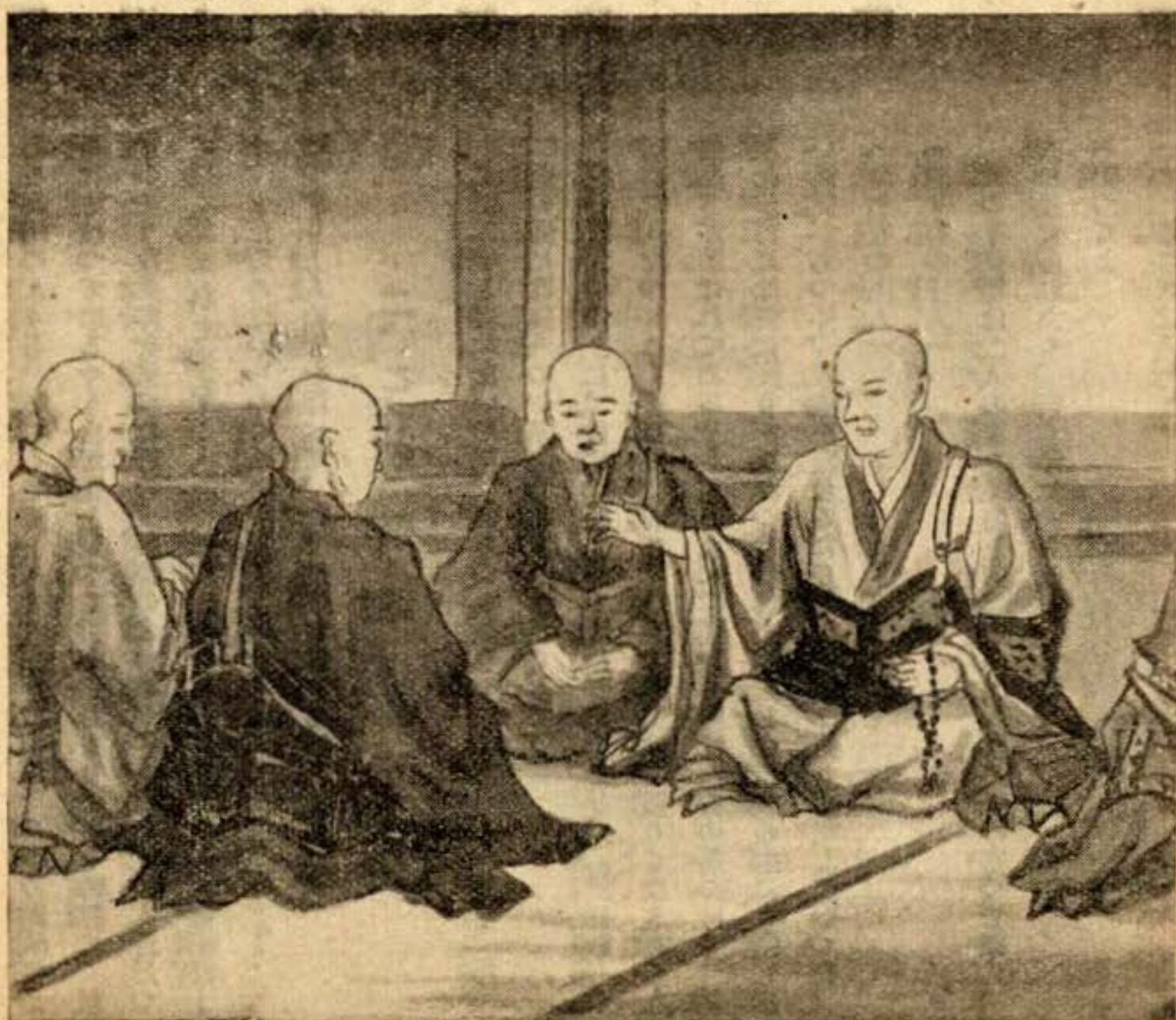
静かな善慧房のこゑだつた。

「思ひもよらぬことぢや。貴僧にまで後指をさゝれようとは口をしい極み。善慧房、いやさ、證空どの、改めてお訊き致すが、木偶になれとでも仰せか——」

「何の、何の、住蓮どの。左様に蹴立てゝは困ります。たゞ他宗の排撃は避けられたいと希ふだけのこと、兎角さがない南都や叡山の忌憚にふれて、老師上人のお胸をわずらひ申させることは忍び得ないと申すので……」

さすがに善慧房はいさゝかの落付きも失はず、

「判つて下されるか、遵西どの。貴僧達の燃ゆるやうな愛宗の一



念、念佛門のために談義せられる貴いまこと——、善慧房とて感激の他はないものを、何で木偶になどなつて下されと頼みませう」

「貴僧たちは、なぜく、一念義一派にもの申されぬのぢや—— 行空、幸西どの等には齒がたち申さぬのか—— あの邪説、あの亂行を何と思はれるのぢや——」

安樂房の氣勢におされていもゐるのか、誰一人口をはさむ者もなかつた。善慧房のこゑも聞えず、静まり反つた中に、秋を告げる蟲の聲が二つ三つ、軒端近くに牙えてゐる。

「老師源空上人も御寛大にすぎる。ことは教義の邪解、この上の不信があらうか。何故、何故、異端の輩を擯出せられないのか——」

次第に嵩まる安樂房のこゑに、住蓮はもう忍んでは居られず、慌てて一座の中へ割り込んで行つた。

「おゝ住蓮の御房——」

「證空どのか——」

「またしても興福寺の徒輩がことを構へてゐるのです」

「起請文連名の日からまだ一年と経ちまうさんのに、重ねての法難、

書を禁中に上る由ですが……」

「左様、七道諸國の念佛停止と、老、老師上人を……」

「師の上人を、な、何と申される？」

「極刑に處せよと強訴する由にきゝます」

嗚咽にからまれて證空の聲は續かなかつた。住蓮も、安樂も、並み

ある同門の人々も、等しく老師上人の慈影を描いた。不斷の御稱名が耳に傳はつて来るやうな幻覺と交つて、七旬あまりの寄る辭波に、以前のやうな光澤を失つた額、數條の太い皺が、幻の中にも目だつて深く刻まれて来る——、圓滿な、柔和な、慈愛に充ちた御相好——、まだ灯のはいらぬ夕暗の中、何か後光でも射して來てゐるやうに、はつきり上人の影を浮べて、たゞ慈嘆に耽けるばかりだつた。

二、この飛躍

まだ二年と経たないのに、何といふ變りやうであらう。住蓮、安樂、二僧の面には別人のやうな柔和さが漂うてゐた。

鋭い眼光の代りに、目には慈しみの潤ひがたゞよひ、皆は細長に切れて人なつゝこく、口邊に綻びる微笑の底には、限りもなう高貴な氣品さが藏はれてゐるやうにみえた。短かく捲げた衣の着つけや、活潑な歩行には更に變りがなかつたけれど、貧しい出裝の中にも侵し難い氣位があつて、談義を重ねるたび毎に歸依の男女を増していった。

「鹿ヶ谷の上人」

「鹿ヶ谷の上人」

街の子供等は二人の姿を見ると何處からともなく駆け寄つて來て、衣の袖に戯れたり、行く手に立ちはだかつては、

「唄つてよ——」

「ね、唄つてよ——」

さう言つて微妙な禮讃の音律に撞れるのだつた。

子供等がもう片言を覚えてゐて、一人が口を切ると、各々が可愛らしく眞似たりした。こんなときには、住蓮も安樂も嬉しさに胸が騒いで臉が熱くなつて來、子供の群にとり圍まれながら無常偈を稱へることもあつた。

ひと頃の住蓮と安樂は例へて見れば、群がる敵中へ單身駒を乗り入れて、双向ふ敵を斬り伏せ、突き刺し、蠻勇にも等しく盲目滅法に前進を續けて來たのであるが、今の二僧は極めて自然に、水の流れにも似て坦々と行く手を開いてゆくのである。岩があれば二流に分れ、堰かれれば堰かれるまゝに小穴を探して洩れて出て、毫も反抗の氣色を見せなかつた。これは大我に生きてゆく心眼の目覺めであり、素晴らしい心境の飛躍だつた。

山門の法師達と道で行きずりに會うても、敵意は微塵も燃えなかつたし、罵詈雑言を浴せられてもこだはりもなく流してしまふことが出來た。

ときには五人十人、叡山の法師達が二人をとり圍んで狼藉を働いたけれど、たゞなすがまゝに身を委せて些かの反撃も試みようとはしなかつた。目も口も閉ぢてゐて、罵りのこゑもきゝ流した。淵のやうな静けさを保つてゐて、右から押されると左へよろめいて行つたし、どつと胸板を突かれてはタ、タ、と後ろへ泳ぐ。又押し返されてはどつと哄笑を浴びたりした。こんな時には街の人々が物見高く集まつて來て

日頃傲慢な叡山の法師達を、蔑みの眼をもつて見つめた。

二僧の折にふれての談義は、かうした機會にも忘れることがなかつた。押されながら、突き返されながら、

「南無阿彌陀佛」

「南無阿彌陀佛」

極めて自然に稱名がくり返されてゐるのみか、侵し難い氣品までが備はつてゐて、人々の心をとらへた。

けふもひねもす街をさすらつて、今しも白河口にさしかゝると、またしても叡山の法師達と行きずりになつた。

「賣主！」

出合頭に「賣主！」と浴せかけられたときには、もう五人も六人も荒法師に圍まれてゐて石礫を受けてゐた。

「女、子供をたぶらかす奴！」

「この女は何ぢや！」

「狂女までに嬖み居るか、賣主！」

押されたり突かれたり、叩かれたり——、住蓮も安樂もちつと目を瞑つてゐたが、瞑つた兩眼からは涙がぽとくと落ちてゐた。賣主と罵られても忍ばう、女犯と言はれても耐へよう——、煮え返る臟腑をちつと抑へて、「阿彌陀佛、阿彌陀佛……」大きな力に纏らうと努めるのだつた。

衣の袖は千切られてゐたし、礫を受けた顔面には、血がにじみ出て

するくくと頬を傳つた。

法師達が立ち去つてしまふと、街の人人が駆け寄つて、

「お上人」

「お上人」

こゑもおろくくと慰めくれた。二人はまた、嬉しさに新たな涙が湧いてくるのを禁じ得ず、泣きながら、

「皆の衆！」

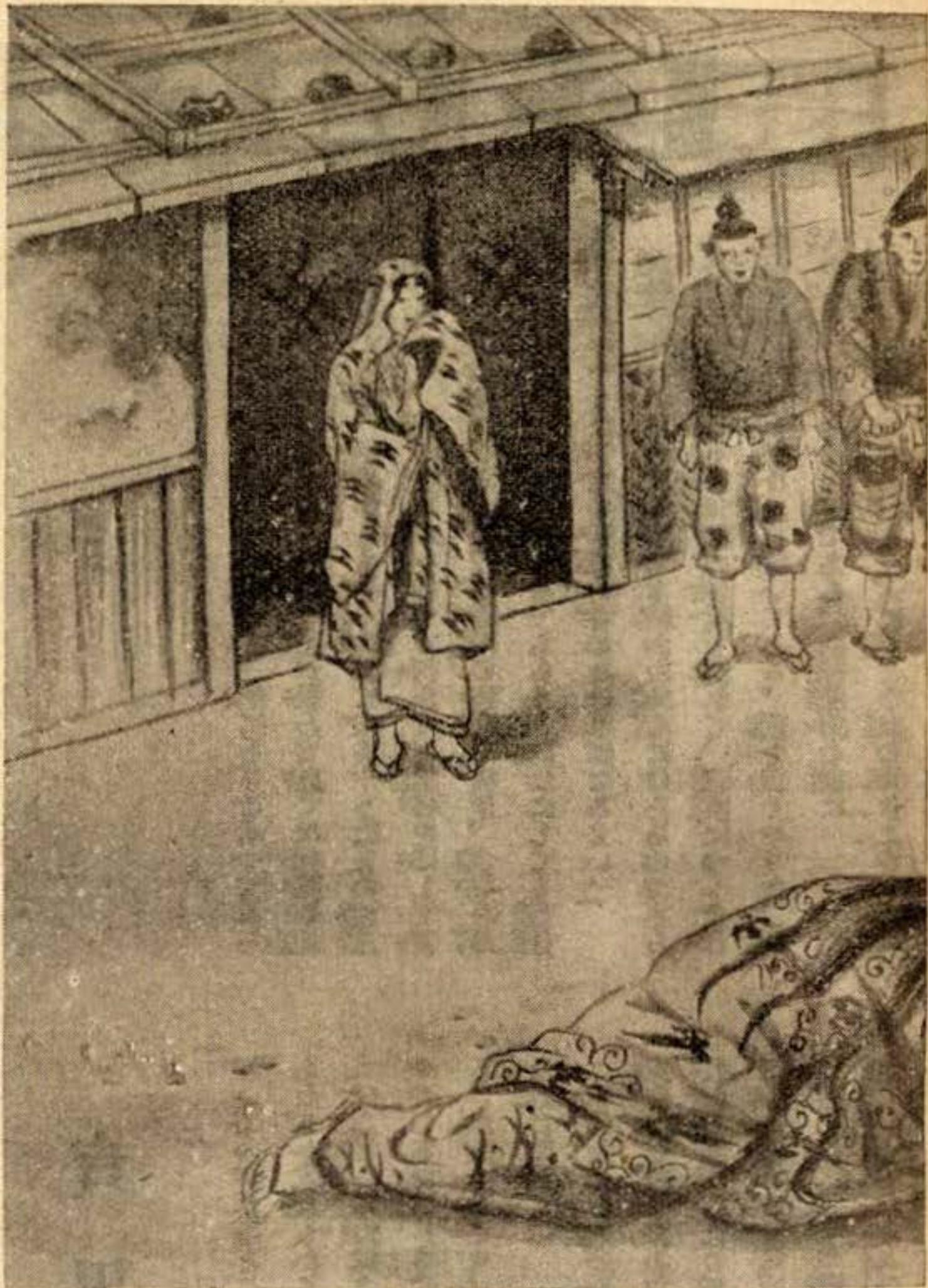
と呼びかけて、



「阿彌陀佛は、弱い者、力のない者をこそお助け下さるのぢやよ。ありがたいことう。南無阿彌陀佛くとお念佛さへしてゐれば、こゝろは春風飴蕩ぢや。ただ感謝して、大きなく絶対の力、阿彌陀佛を信じてお縋り申すのぢや。解るかう、判つてくれるかう」

人々は、たゞもう二僧の心根に打たれて、口々に稱名するのだつた。が、このとき、人目も憚らず二僧に駆け寄つて、わつと泣き崩れた女がある。瞬間、二僧の腦裡をかすめてすぎたのは、今のいま「この女は何ぢや！」

割れ鐘が耳近くで鳴つてゐるやうに聞いてゐた荒法師の言葉だつた。それが今は自分達の言はんとすることなのだ——「一體この女は？」二人は心の中で呟か



ずには居られなかつた。

住蓮は、しげ／＼とその女を見守つてゐるうちに、百年もの謎がすつと解け去つたやうな思ひがした。といふのは、ここ一二ヶ月の間といふもの、影のやうに二僧を慕ひ歩いてゐた女があつたのである。そ

の女の正體が、住蓮にも安樂にもまして街の人々にも判らず「得體の知れぬ女」として謎のまゝに過して來てゐたのであつた。その謎の女に定つてゐる、その謎の女が、今は正體を現はしてわつと泣き崩れて來てゐるのだ——。

女は名乗らなかつたけれど、住蓮は知つてゐた。長いあひだ忘れてゐた更科の記憶が、しげ／＼と見守つてゐるうちにちらりと再現して來たのだつた。まだ住蓮が「信國」と名乗つてゐた時分、栗津ヶ原での敗戦で、はからずも手厚い看護を受けた、あの青木庄左衛門の娘更科——、人知れず淡い戀こゝろを抱いていとしく垣間みたことのある更科——。

その日の夜更け。

めてゐて、蠟燭の焰がたつた一つ風にゆら／＼となぶられてゐた。その側に、先程から凝と端坐して物思ひに耽つてゐるのは住蓮である。垣が揺れる度に、彼の影法師は長く短かく動いた。影がさまざまに變る毎に、彼の胸にもさまざまな更科の姿が映つてくる。(續く)

晩 春 懺 悔

吉 田 絃 二 郎

今年^{こゝね}は決して花^{はな}を見まいと思^{おも}つて、家^{いへ}にとちこもつてゐるが、風^{かぜ}につれて何處^{どこ}からともなく花^{はな}が飛^とんで來^きては佛間^{ぶつま}の縁^{えん}側に落^おちてゐる。伊豆^{いづ}からも早く訪^まねて來^くるやうにとの消息^{しうしき}があつたので、花^{はな}の散^ちるのを待^{まち}つて行^いかうと返事^{へんじ}を出^だして置^おいたが、花^{はな}が散^ちれば間^まもなく狩野川^{かののがは}の河鹿^{かしか}が鳴^なき、水戀^{みづこひ}ひ鳥^{どり}の哀切^{あいせつ}きはまりない聲^{こゑ}も聞^きえるであらう。何れ^{なん}にしても當分^{かうぶん}は骨^{ほね}を刻^うむやうな日夜^{にちや}の苦思^{くし}を嘗^なめなければなるまい。

水戀^{みづこひ}ひ鳥^{どり}といふのは何處^{どこ}でも靜^{しず}かな山里^{やま}にはゐるのであらうが、わたくしは年々^{としとし}天城^{てんじやう}の初夏^{しゆか}を訪^まねて、雨雲^{あめぐも}につゝまれ山^{やま}を眺^{なが}めては水戀^{みづこひ}ひ鳥^{どり}を聴^きいてゐる。萱^{あや}を裂^さくやうな、愁^{うれ}人の腸^{はらわた}に沁^しむやうな聲^{こゑ}である。西行法師^{さいぎやうほふし}の歌^{うた}に

山里^{やま}は谷^{たに}のかけひのたえだえに水^{みづ}こひ鳥^{どり}の聲^{こゑ}きこゆなり

といふのがあるところから見れば、西行法師^{さいぎやうほふし}も吉野^{よしの}か、比叡^{ひゑ}あたりか、京^{きやう}ちかくの山^{やま}で水戀^{みづこひ}ひ鳥^{どり}を聴^きいたのであらう。五月^{ごご}ころの山^{やま}はまだ嫩葉^{わかば}も柔^なかで、風^{かぜ}にも耐^たへないほどのやさしさを感じ^{かん}じさせる。惣^{そう}じてこのころは鳥^{とり}の聲^{こゑ}も柔^なかである。水鷄^{みづな}にしても、水戀^{みづこひ}ひ鳥^{どり}にしても三光鳥^{さんかうとり}にして同じ柔^なかな感じ^{かん}じに鳴^なく。

水鷄^{みづな}なくと人のいへばや佐屋泊^{さやどまり}り (芭蕉)

東海道^{とうかいだう}を旅^りしてゐた芭蕉^{ばきやう}が、水鷄^{みづな}の聲^{こゑ}を聞^きくためにわざ／＼佐屋泊^{さやどまり}りにしたのであらうが、葦^{あし}の葉^はのかゞよふところになれば思^{おも}ひ出^ださるゝ句^くである。

雲^{くも}を仰^{あが}ぎ、鳥^{とり}の聲^{こゑ}をたづねて無常迅速^{むじやうしんそく}の世^よをたゞ風流^{ふうりゆう}の一^{ひと}念^{ねん}に終始^{しうし}した古人^{こじん}の心^{こゝろ}を尊^{たつと}く思^{おも}ふ。何^{なん}うせ百歳^{ひゃくさい}まで生^いきたと

ころで、見はてぬ夢である。今日一日生き得たことをしみじみと感謝するほどの殊勝な心になるのがせめて凡夫の悟りといふものであらう。雲を見ても、鳥の聲を聴いても今日限りとおもへば涙の出るほどありがたい。生きることには悲しい。しかしこれほど尊い、嚴肅な實在が何處にあらう。

x

キリストは水の上を歩いた。法然上人は夢に善導大師とお逢ひになつた。蛇が聴聞に來た。かういつた奇蹟を比喻であると思ふ人もあらう。キリストがわづか幾片かのパンと幾尾かの魚を五千人の聴衆に分け與へて満腹させたといふ聖書の物語は誰も知つてゐることである。オスカア・ワイルドはキリストの靈的な雄辯と人格が五千の聴衆を酔はしめたのだと説いてゐる。この説き方は一應は面白い。しかしそれ以上でないければならぬ。五千の聴衆はキリストの説教を聴かずとも數片のパンに満腹したであらう。わたくしはその奇蹟を信じないではをれなくなつた。キリストが三日目によみがへつたことも眞實であらう。

法然上人と淨土に於いて再會することをゆるされないとす

るならば宗教は存在しないも同然である。また法然上人とわたくしたちと淨土に於いて再會する機縁を恵まれないうなことであつたら、わたくしたちの信仰はたゞ一種の倫理觀に過ぎない。

奇蹟とはいふものの、奇蹟を持たない宗教は道徳に過ぎない。宗教的偉大な人格は、神であり、佛である以上に、超人間的な存在を實現するのが當然である。草木も成佛し、死人もよみがへるのが宗教である。わたくしたちは必ずその愛する者とふたゝび淨土に於いて邂逅するであらう。もし死がわたくしを迎へるであらう時、わたくしはよろこんで死に還るであらう。そしてもし一切が空であつたとしてもわたくしは絶望しないであらう。空より生まれ、空に還る。花は土から咲き、土に還る。

x

芭蕉は俳諧修行に於いて「格に入り格を出づべし」と教へてゐる。格は束縛である。しかし一度格に入らねば「邪詠にはしり」、「格を出でざる時は狭く」、「格を出でゝはじめて自在を得べし」と説いてゐる。

宗教生活に於いて思ふことは戒である。

戒は格である。戒の必要はないといふ人もあるであらう。

キリストはその弟子たちが安息日に麥の穂を摘んだのを非難された時、人は安息日のためにつくられたものでないと言つた。安息日を守るといふことは戒である。戒が人間の生活を殺す時戒は本末を誤つたことになる。キリストはサドカイやパリサイの徒の死せる戒のみに依る偽善者の生活をさげすむのである。

しかし戒すら守ることのできない人間にまことの宗教はない。自分自身を最も深い敬虔な心の境に生かさうとする精進は戒ではないか。端的な念々懺悔の心に生きようとする努力は戒ではないか。一瞬一刻も佛に於いてのみ生きようとする至念は戒といふ形によりて實感せられるであらう。戒は目的ではない。しかし戒を持することなくしては正しい宗教の道は歩まれないであらう。戒に入りて、戒を出でなければならぬ。しかしわたくしのやうな凡夫には戒を出るといふことはわたくしの死の刹那までは不可能であらう。實際をいふとわたくしのやうな凡夫には戒を持することも容易でない。だから死ぬまで戒を出づるなどといふ大それたことは考へない

が、いふ思ふ。これは俳諧の場合を見てもわかる。芭蕉翁の説いた格にも入らぬ人たちが、最初から格を出でゝしまつた結果、今日のやうな鶴的な俳句を拵へてゐるのではないか。戒を必要としない程の人になりたい。戒を氣にしないほどの人になりたい。しかしそこに達するまでは凡夫にとりて戒は大切である。

x

花も散つて行く。去年の夏から手を入れたことのない庭は朽葉枯葉に埋めれてしまつた。辛夷の雪のやうに白い花片が一面に散つてゐる。真も朽ち、池も涸れ果てゝゐる。わたくしは庭に下りては山椿、山吹、木瓜、杏子、海棠の花を手折つて佛に供へてゐる。二匹の犬だけがわたくしの唯一の家族である。犬は佛間の障子の襖を噛み破つてはをり／＼佛間に闖入して寝そべつてゐる。叱る氣にもなれない。永遠に歸り來ぬ故人を待ちつゝ、わたくしはたゞ二頭の犬とともに廢園の逝く春を眺めてゐる。しみじみと魂の底まで冷えやうな晩春である。



一頁評論

増税の話

馬場財政、結城財政以来、出たり引込んだりしてゐた新増税案が、遂に事變下第二年の今議會を通過した、内容を見ると直接税が約二億八百萬圓、間接税が約九千二百萬圓、併せて平年度の増収が三億一千萬圓といふところだ。

物價騰貴の今日この頃、又ぞ増税ではたまらないとこぼす向きもさぞ多からう、だが仔細に考へて見れば、軍事公債は三十億を突破し、十三年度の支那事變費としてこの議會に要求されるもの四十八億にならうといふ昨今のだから、敢へて驚くには當らない。三億そこ

くの増収では、精々臨時軍事費豫算の利拂額位にしかなかないからである、支那事變の基本財源は依然として公債發行である、だからその意味では、増税の目的は全國民が戦費の調達に幾分なりとも貢献し、國民の放漫な消費を諷めるといつた、むしろ國民精神總動員的な必要の方が多いかも知れない。

ただ今度の増税は去年の北支事變特別税に較べると間接税の割合が甚だ増大してゐる、中にも物品税として我々の日用品が大分槍玉に擧がつてゐる、時計、萬年筆、靴、家具、漆器、陶器、メリヤス、化粧品、マツチといった工合で、現在奢侈品、贅澤品十種目に過ぎなかつた物品税が一躍五十種目に跳ねあがつた、この中にはいはば第二次生活必需品に屬するものが可成

あるのである、續いて一石四十圓を五十圓に引上げた酒税は、上戸黨には大痛手であらう、併し甘黨とても御同様で最高一割といふ砂糖消費税の増徴新設で吊合ひをとられてゐる、この外一ガロン十五錢引上げのガソリン税は通行税の復活と並んで、人足を重くしよ

うといふのである、又入場税も出來て、キネマ、芝居から麻雀クラブまで包括されてゐる、最後に第三種所得税の免税點千二百圓が千圓に引下げられた、これで今迄免税點に今一步といふところでのう／＼してゐた連中も一寸あわて氣味である。

間接税の缺點は、それが次ぎに轉嫁されていつて、物價高といふ形で結局消費者大衆の肩にかぶさつてくるといふことである、だからこうした増税と同時に、この轉嫁を喰ひ止めるやうな物價對策が併行的に行はれることが是非必要なのである、直接税の場合でも同様で、免税點の引下げでは、手数のかかる割合に金額は少いものなのだから、超過累進税が順々に引上げられて行つてゐるのだ。

いづれにしても増税とは嬉しい話ではなからうが、一轉して炎熱酷暑の戦場に、身命を賭して馳驅してゐる人々のことを考へれば、未だ／＼生ま易しい部類である、又公債一點張でも行けないこともないのだが、それでは子孫の負擔許り尠大になり過ぎるのである。(中田一郎)



名將と信仰

不動明王

小島 健 三
大羽 四 郎 畫

すが、いろ／＼な傳説が非常に面白いと思ひます。しかし、けふは、ちよつと變つてゐる「甲斐の不動明王」について少々書きませう。

○

佛像にちなんだ因縁話とか、その他面白い話は随分あるやうです。四國室戸崎の國寶になつてゐる腕觀音、これは石像ですが、石佛として日本で最古のものではなからうかと云はれてゐますが、この觀音の片腕は、何者にか持つて行かれてゐます。それから鑑眞で有名な唐招提寺の千手觀音ですが、寺傳には「天人の作」とあります。

天下の名將武田信玄が、駿州から歸陣してどうも自分の體の常でないことを識りました。それで、醫師の板坂法印を招いて診察させますと、驟(食道瘧)だから一二年の壽命だと云はれ、日夜怏々として愉しみますませんでした。が、武威を近國にふるつた姿形を遺さうと、佛師運阿彌を呼んで、像を彫刻せました。

時がたつて出来て來たのを見ると、生ける信玄と少しも變りません。信玄非常に欣んで、さつそく勝頼をはじめ諸將を招いて、「わしは、もうこれからさき、長くは生きてゐないと思ふ。それで佛師に頼んでわしの姿形を彫刻せると、こんなによく出来た。わしが亡くなつた後は、忤勝頼の背後にいつもそばさせておくから、勝頼の命令は、わしの命令と思ひ、よく忤を弼けて武田家の隆盛を謀つてくれ。また、勝頼も老臣の諫言は、わしの言葉と思つて、よく愼んでこれに従はねばならぬ」さう云ふ信玄の眼には、涙が光つてゐま

した。一同、水を打つたやうにしーんとしました。その静かなうちに、すーり泣きの聲がしたと思ふと、潮のやうに廣間全體にひろまり、しばらくは、一人として顔をあげるものもなく泣き伏してしまひました。

「主君——」

さう云つて、ぐぐ……と膝をすゝめたのは、武田家重臣、長坂、跡部の兩人でした。ハラ／＼と疊のうへに涙を落して、

「たゞ今の主君のお言葉、有難く肝に銘じました。この御像さへお遺し下されば、主君が御在世も同じことに存じます。武田家萬々歳にございます」

「勝頼君の御命令は、主君の御命令と思ひ、きつと武威を天下にとゞろかせます」

ふたりは、火のやうな言葉で、信玄にひました。それを聞くと、信玄は蒼ざめた顔にさも満足げな笑をうかべて、

「それを聞いて、わしも安堵した」

さう云つて、ちらと一座を見たとき、泰然と上席に坐をとつてゐた眞田安房守昌幸

に眼がとまりました。昌幸は、智謀ならぶ者のない名將です。その昌幸は、ひどく浮かぬ顔で長坂、跡部の兩人をぢーツと見つめてゐます。

「眞田、何か異存でもあるか？」

信玄は、やさしくさう訊きました。すると、眞田昌幸一禮して膝をすゝめました。

○

「たゞ今、長坂、跡部兩氏の意見では、この御像さへあれば、武田家萬々歳とのお話でしたが、眞田昌幸は少々違ひます」

「違ふとは？」

「主君が、この像を遺されたのは、主君亡き後は勝頼君を弼け、京都にのぼり天子を奉じて、天下に號令せよとお思召と存じますが、勝負は時の運、戦は勝ものとばかりは決つてをりませぬ。わが主君は、甲斐より出て四方の國々を攻略いたしました。が、もし主君が亡くなつたと聞いたら、この甲府を目ざして四方より攻め入ることは必定にございます。その時、もし、この甲

斐の軍勢が負けをとらばどうなりませう」その時、長坂、ぐいとばかりに眞田を睨んで、吐きだすやうに云ひました。

「ま、負ける？ そんな事があるものかッ」

「いや、戦は時の運、勝とばかりは決つてをりませぬ。もし、わが軍が負けをとつた場合は、この館に敵が亂入して、まつさきに、この信玄公の像を鞭うちませう。これが日ごろ遺恨に思ふ信玄の像だといつて、手足を斬はなし、首を落しませう。わたくしは、敵の土足にかけられるのが、いかにも残念なのです。天下古今の名將、武田信玄公の像が、心ない敵の刃にかゝるのが口惜しいのです」

さすがは、眞田昌幸人の心をあぐるやうな烈々たる言葉でした。

ぢツと訊いてゐた信玄、

「眞田、よう云つてくれた。わしは、迷うたのだ。血氣の頃は、こんな女々しい心は微塵もなかつたのに、板坂法印に壽命をかされてから、この世に未練がましましたと見

える。櫻花は、一夜にして散つてこそ、名花であれ、人も死ぬべき時に死なねば、恥が多い。いらぬ未練を出して、後世とんだ笑ひ草になるところだつた」

さう云つて、信玄は、ギリリと刀を抜き、精根をつくして佛師運阿彌が彫刻した己の像を、あはやつ二つに斬おろさうとした時「主君、な、何をなされます」

跳びこんでとめたのは昌幸です。

「わしは、夢から覺めたやうだ。もう、この像は遺すまい。斬すてるのだ」

信玄の體は、激情に浪のやうにゆれてゐます。昌幸は、兩手をついて、

「主君、その御像わたくし頂戴いたしたうござります」

「わしには不要の像。いかにも仕はさう」

信玄は、さう云つて力なく退座しました。

昌幸は家臣に、信玄公の木像を屋敷に運ばせ、一間に丁寧に安置しました。

○
それから、一七日の後です。

信玄公をはじめ勝頼君、それに長坂、跡部、馬場の重臣等に、眞田昌幸から丁寧な招待状が届けられました。

諸將は、定刻に續々と昌幸の館につめかけました。やがて、信玄公の到着です。一同玄關に迎へると、

「ほう、お主らも招かれたか？」

寂しい顔に笑を浮べ、座敷の正座につきました。

廣い庭に春の日ざしが明るく、鶯が鳴いてゐます。信玄は、

「眞田、何にか祝ひ事でもあるか？」

「はい、頼んで置きました不動明王が、やうく出來ましたので……」

「不動明王、それはお芽出たい。不動明王は武人の守護神ぢや。拜まして貰はうかな」

「たゞ今、ご案内申します」

昌幸は、靜に立ちあがりました。さすがは、後世眞田昌幸、と謳はれた武將だけあつて、ちり一つありません。鏡のやうな長廊を昌幸さきに立つて信玄その他の諸將を

案内しました座敷は、不動明王を安置するためわざ／＼つくつた檜材の清楚な一室です。スウーと木戸があくと、正面に不動明王、梵名阿遮羅毘瑟、五大尊明王の一つで、盧盧遮那佛が一切の惡魔を降伏させようと、假りに變身して忿怒の相を現はしたものの、通身青黒、眼を怒らし、右手に携へる利劔は、煩惱惡魔を斷伏し、左手に持つ索は、その方便の自在を示す象徵、烈々たる大火焰を背にし、一同をハツタと睨んでゐるではありませんか。

「おゝ、見事な不動明王ぢや——」

信玄は、思はずつぶやきました。一同禮拜がすんで、立ちあがらうとした時です。

信玄は、「眞田——」

と、靜かに聲をかけました。昌幸膝をすすめて、

「主君——お氣づきにござりますか」

「うむ……」

唇を噛んだ信玄には、明るい微笑がたたやうてゐました。そんなことを知らぬ長

坂は、「眞田殿、なぜ不動明王を祀られました。貴殿、不動明王を信仰してゐると聞かなんだが……」

「長坂殿、あの御像を不動明王とごらんか？」「は……眞田殿とも思へぬ。火焰を背負ひ、劔を持つてゐるからは、不動明王にきまつてゐるではないか？」

「御一同、よく御覽下され、あれこそ先日わたくしが頂戴いたしましたわが主君の御像でござります。わたしが佛師に工夫をさせて不動明王に變へさせたものでござります。それを聞くと一同は、吸ひつけられたやうに像のまへに行き、思はず、「あつ——」と、聲をあげました。姿形こそ不動明王ですが、その顔は、まぎれもない信玄ではありませんか。信玄が、不動明王に姿形を變へて諸將を叱咤激勵してゐるやうに見えます。

「眞田殿、この御像は……」一同は、彈か

「せつ角、運阿彌が彫刻した主君の御像を斬



れたやうに昌幸を見ました。

紀談に記してあります。

すてるのは、佛師の落膽ばかりではなく、主君の思召を反古にするもの、不動明王につくり直せば、たとへ信玄公の像だと判つても不動明王は、武人の守護神、神體を懼れて、足蹴にしたり、手足を斬落すことは、よもやあるまいと存じます。されば、主君の御姿形は、そこなふことなく後世にまで傳はりませう」肺腑を抉る昌幸の言葉に、一同の頭は自然にさがりました。信玄、ツカ／＼と進み出て、力いつばい昌幸の手を握り、「眞田そちの心情有難く思ふぞ」さう云ふ聲も、涙に顔へてゐました。その像を、善光寺に藏めて置きましたので、果して、天正十年の亂に織田父子、それに徳川の軍が、甲府に亂入しましたが、少しも像を損することなく、今はなほ善光寺に不動明の像があると、常山



談・座・仰・信

聲の念佛

中野 尅子

□「あの大きな聲をして念佛を稱へるとか、木魚なんかまで、叩くといふことは、どうも野蠻で、少々時代遅れのようにすネ」

○「どうしてです——」

□「だッて、あんなに大きな聲を出すといふことは、お寺さんや、大きな邸宅にでも住むである人には出来るか知らんが、我々、建て込んだ裏町の小さな借家の中に住む者には、兎ても出来ない相談で、何とか、念佛なんか稱へなくて救はれる方法はないモンですかネ……」

○「そーいふ處に居る人程、大きな聲を出して念佛し、ドン／＼木魚をまで叩いて念佛して行く

と、あなたばかりでない、周囲の人まで皆救はれるンですよ」

□「馬鹿な事を被仰い、あんな阿呆念佛をしたら、直ちに、隣りや、前の家から、嘔鳴り込まれますよ。いや、我々二階にでも間借りしてゐる連中は、第一下の女将さんが承知しません。二階へ馳け上つて来て喚きます。それよりも先づ女房が

アナタ、そんなに念佛されち

や、坊やが寝ませぬ……と、足元から鳥が立つように御コゴトです。

我々の周りには、夜十二時まで電車の車掌をして来て、朝ユツクリ寝て居りたいと思つてゐるものがある。或は、夜九時まで夜業をして来て、ユツクリ一杯飲んで、いゝ氣持になつて、疲れが休まりたいと思つておる者がある。そんな人々が、コノ念佛を聞いたたら、縁起が悪いどころか

ウルサイ！ 此の狂人奴！

と、一杯氣嫌で、躍り込まれる位は間違ひない處です。だから、此の念佛を申せ——といふ事だけは、どうも、私には、出来ぬ相談で、我々貧乏人には向かぬ相談であると思ひます。だからどうしても念佛する氣になれぬのです。いや、してゐても氣乗りがせぬのです。それよりも、或はコレは時代的にも適しない方法ぢやないか、何とかもつと改良の餘地がありはせぬか。それとも他にもつといゝ道があつたらなどと、疑問や要求が抱かれて、私は、眞面目に考へてゐるのです。」

○「アナタの御事情としては御同情申します、又、そーお考へになるのも無理からぬ事と思ひます。而し、アナタは、先づ第一に、自分の事情を元とし、周囲

の情慾を動かぬものとして置いて、コレに念佛を改造して取付けようとし、宗教を改正して喰付けようとしてゐられる。

所謂、人間を「法」によつて改造せようとするのではなく、又社會を「道」によつて革めやうとするのではなく、人間に「法」を合せ、社會へ都合のいい、一時的宗教を造つて張り付けようとする便利主義ぢやないでせうか。

隣のゴゴトや、隣りの飲んだくれの苦情ばかりを飾れ、そんなものにばかり氣を遣つて、さういふ連中の御氣に召さぬから念佛が申せぬと、それ以上に念佛を研究し、念佛を深く申した事がないのぢやないですか。そして、さういふ人々の好みに合はぬから、それで念佛が時代遅

れたの、狂人沙汰だのと被仰るが、それは全く自分一個の生活條件を本位にした獨斷で、少少、早計に失するものぢやないでせうか。そりや、子供の泣くことも、世間の人々の腹立ちといふことも、考へに入れんならぬが、それは寧ろ「法」によつて「人」を正す。「道」によつて社會を教育するといふ方が、本當ぢやないでせうか。

先づアナタが、本當に念佛を申し、本當に念佛の人になつたら、坊やが寝ぬのでもナイ。奥さんが八釜しく云ふのでもない。女將さんが嘔鳴つても來ぬ。近所の者が非難するものでもない。

□「そりや、そうなるまでが大變です」

○「けれ共、そうなつた時、念佛がアナタを改造し、念佛がアナタの家庭を幸福にし、念佛がアナタの周圍、近所長屋を改善したものぢやないでせうか」

□「そりや、そうです」

○「それなら、今のアナタの事情に合はして念佛を改廢するのでなく、念佛によつてアナタの生活を立て直すことが本道ではないでせうか」

□「そりや、そうでせう。そうですが、實際問題としては、我々のような身分に在る者には、仲間、念佛が申して居れぬし、念佛が申されぬですよ」

○「そりや、申されぬと先きへ、きめてゐるのが間違ひです。そんな事誰がきめたのです。今アナタがきめてゐるのでせう。アナタの現状維持の精神が、今、きめてゐるだけです。その現状維持の精神が悪い。その精神をブチ破つて行くのが「求める心」です。まだアナタには十分、求める心が出て居らぬ。そして若し念佛を申しかけたら周圍からの反對が起るだらうと、初めぬ先きから不安や杞憂を抱いて、第一歩を踏み出し兼ねてゐるのです。」

□「いや、實際やつて見て、私は困つてゐるのです」

○「その、困つてゐる——のが先きであつて、求める——のが後になつてゐる。それが臆病といふものです。

道心が先きとなり、信心が第一義となつて、生活を破壊し、生活を創造して行くようになつ

た時、初めて「求道生活」「精進生活」と云ふのです」

□「そう云はれや、恥かしい次第です」

○「それでせう。それなら、念佛を良い、悪いと批評して居らずに、狂人奴郎になつて先づ念佛して行つたらどうです。それが本當です。

キリストでさへ「吾れは、此の世に平和を出さんが爲めに來れるに非ず。双(囀ひ)を出さんが爲めに來たれり。子をして親に背かしめ、妻をして良人に背かしめ……」と云つてゐられる。家庭の眞の幸福になるが爲めには、一時的に信仰上の不和衝突を來す位は當然だと云つてゐられるのです。そうした荆の路を通つてこそ、本モノになるのです。

だから、ソレになるが爲めには、聲を破り、木魚を幾つも叩き壞して念佛して行く位は當り前で、其後、初めて念佛を會得し、念佛を發得して念佛の人となつた時、念佛を論ずるも可、念佛を應用する妙術も、自づと出て來るといふものです。

それまでは、兎に角、たゞ一向に念佛すべしと云はれた先徳の教へに順つて、一途に愚鈍念佛をして行くことが本當です」

□「けれ共、念佛は口に喋舌つてゐるだけではいかぬでせう。心に、眞實、如來さまのお慈悲が

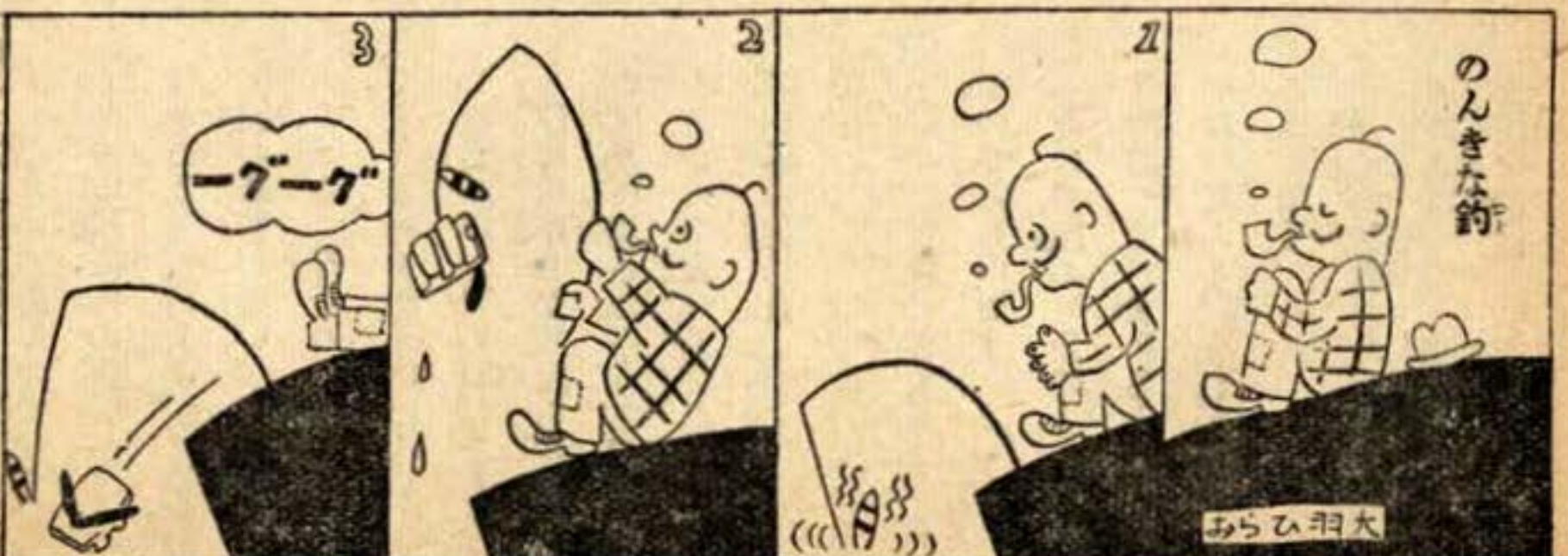
わかつて居らなくては——」

○「勿論、それには違ひないが、そういへば、所謂「心存助救、口稱南無阿彌陀佛」で、心に先づ信づることが先きだ。そして其上で口に南無阿彌陀佛と稱へ

るのだ等と、如何にも尤もらしく、知つたか振りの説明をして、心存と口稱とを二つに分けて、内に思ひ、外に稱するなど、云ふのはいかぬと思ひます。

信心正因、稱名報恩など、いふ言葉も、大變い、言葉だが、素人流にこれを表面的に解釋して、信心が第一、稱名は第二でいい。憶念の信が大切であつて、聲の念佛は、信心を得た上での沙汰である、空ら念佛などは無駄の骨頂だなど、いふのは、一應は正しいが、十分ではないと思ひます。」

□「けれ共、信仰を得て居らぬ者が、聲にまで出して無理にあの念佛を申すといふことは、無駄ではないでせうか。無駄でないまでも、確かに實際、苦痛ですネ……」



○「信仰を得た上での事とか、信仰を得て居らぬとかいふこと、又は無駄だとか、無駄にならぬとかいふ事はどうでもいゝ、そんな事は考へんでもよろしい。私は「聲」に出して——」念佛申すといふ事には大變意義を感じます。

實際、聲といふものには不思議で、「聲」に對する研究が、もつとく深くなつていゝと思ひます。私は、そうした研究家でもないし、又深い體驗もないから、詳しい事は知らぬが、法然上人なども、

聲について決定往生の思ひをなすべしと仰被つてゐられるから、法然上人の聲に關する御觀察なども深く研究したいと思つてゐます。

善導大師には所謂、有名な念

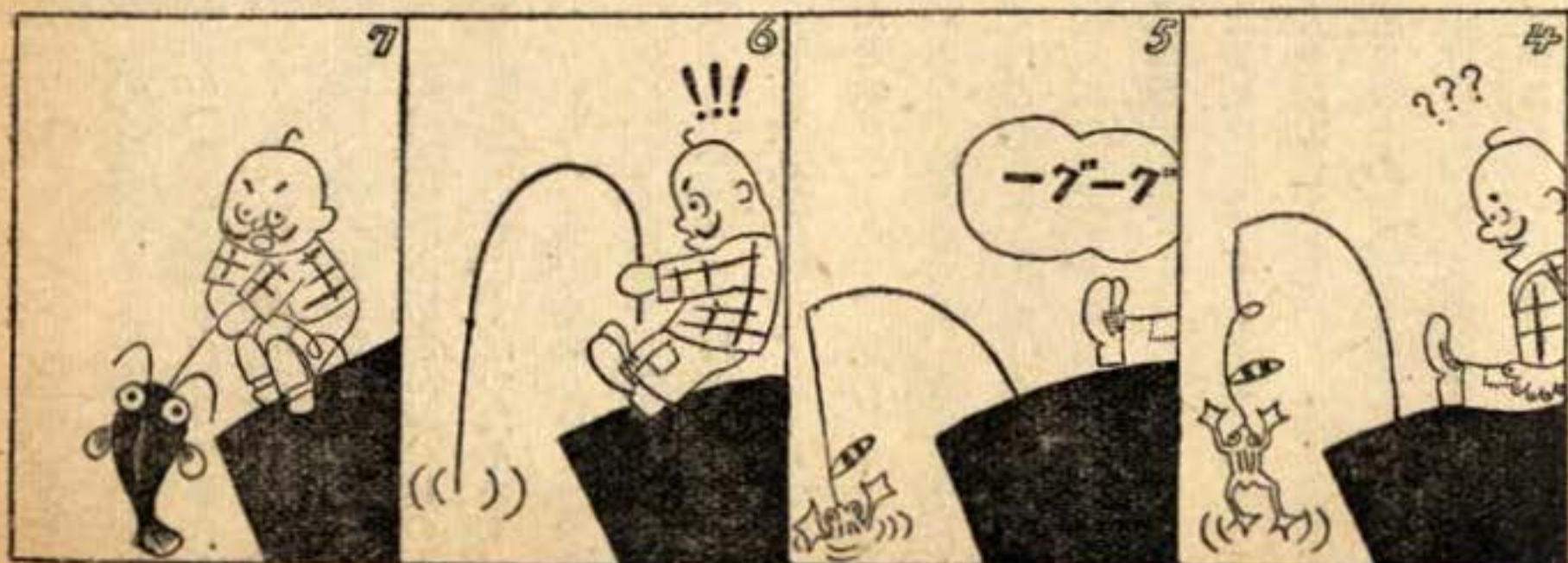
聲は一の判定があり。古來、大念は念佛を見る、大念とは大聲なりと謂はれ、高聲念佛十徳などが數へられて居ります。

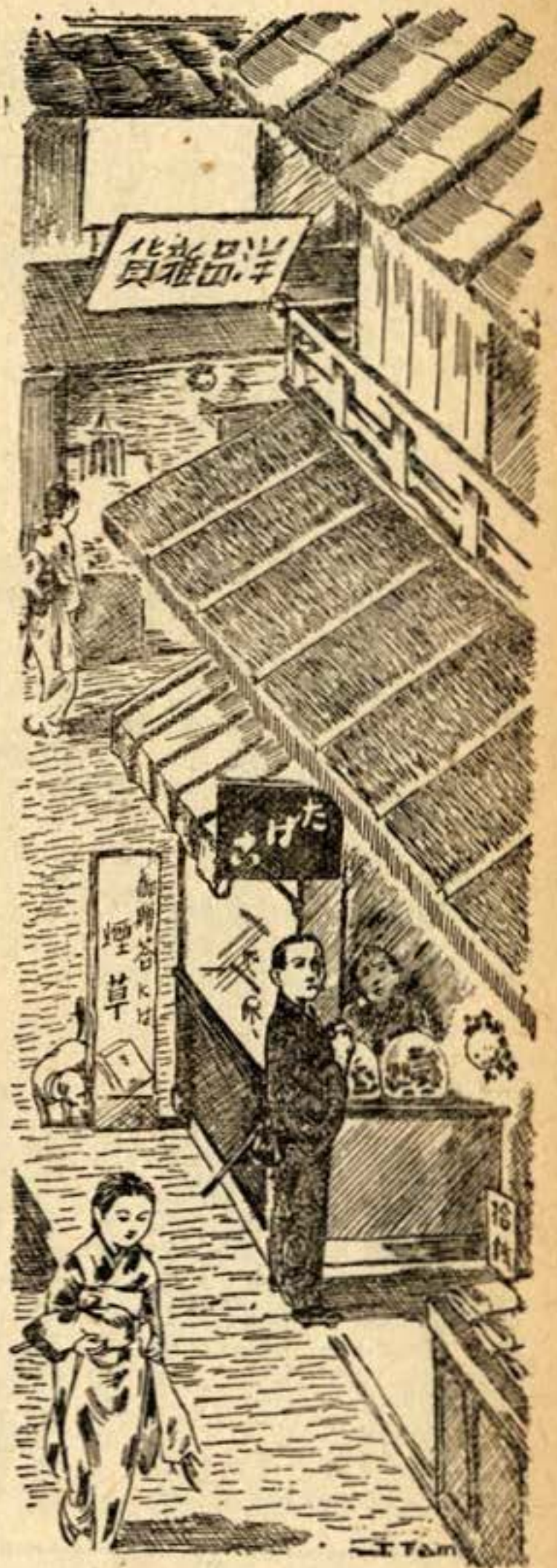
私は、私の實際やつて來た二の實驗上からも、念佛は聲に出して申すのがいゝ、いや本則だと思ひます。

自分達の本當の「人間魂」、云ひ換へて「佛性」——即ち、私達の奥に隠れてゐられた如來さまが躍り出された時は、其の瞬間、直ちに聲まで更ります。

所謂、本當に有難い心持になつた時は、本當に有難い聲になる。反對に邪しい心や、嬉らかな心、腹立ちの心の時は、聲まで怒聲、罵聲、淫聲であります。これは、靜的な瞑想や、默坐などをしてゐるだけでは十分わからぬが、「聲」になると、誰にで

も、すぐわかる。だから、一番初めの、女房さんが怒つたり、近所の者が騒ぐといふのは、有難い念佛になつて居らぬから騒ぐので、きつと眞剣な聲、有難い聲になつてゐたら、周囲の者が呪ふどころか、聞き惚れ、有難がり、道心をすら起こします。實際、本當に心から念佛してゐる時は決して周囲に邪魔になるものではなく、子供はスヤ／＼と眠つてゆき、隣りの夫婦喧嘩も止むといふのが實際です。周囲を怒らせるのは、自分の心がカタナイからであり、これは申ししてゐる自分が、申ししてゐて一番先きへ感じます。だから、まず／＼自分が反省し、懺悔して念佛申してゆく。これは、人の念佛を聴き、自分の念佛を「聲」にして「聞くとき眞先きに感ずる「聲」の功德です。」





傳 僧 高

七ツ坊經由來記

池 田 英 淳

確か昭和二年の梅雨上り、夏蜜柑が味覺を
そゝる頃でした。私は妙なものを見たのです。
憶えておいでの方もありません。朝出かける
時には何もなかつたのに、夕方歸る火灯し頃
の、どの家にもどの家にも、軒先に枳殼の葉

と夏蜜柑が吊されてあるのです。ムツとする
いきれの中に、あのトゲトゲした葉と甘酸つ
ばい香りとが醸し出す印象を、私は今でも忘
れることが出来ません。

角の煙草屋の小母さんに尋ねて見ました。
「妙なものがブラ下つてゐますね。何かのお
呪ですか？」

「呪つて云へば呪でせう
か。子供のあるお家では大變な
んですよ。何しろ昨日の事ださ
うですがね。太田の吞龍様の吊
鐘が、何うしたとか落つこつ
て、御住職の坊さんが、其の下
敷になつて亡くなつたんです。
いよくお亡くなりになる時
に、子供を千人殺す」と仰言
つたんですつて。何故でせうねえ。先程親切
に知らして下さる方があつて、かうして置け
ば大丈夫だと云ひますので、家の坊やに若し
ものことがあつてはと思つて、大急ぎで吊し
たんです。ほんたうに大丈夫でせうかしら」
私は朗かでした。古いし來りを因襲と嘲笑
し、常識で判斷出来ないやうなあらゆる宗教
論を、單なる觀念論として片付け、それでゐ
て、何か大きな力にすがりつかなくてはあら
れない矛盾に苦しんでゐた其頃の私には、正
體を見せつけられたやうな安慰さを感じたも
のです。吞龍様の御住職には、一度お目に掛

つたこともありますし、又宗教大學で教鞭を取られたこともあるさうですし、眞逆そんな無茶な事を遺言なさる筈ありません。

處が、下宿へ歸つて見ますと、矢張り同じやうに吊してあるのです。私の下宿は主人夫婦と、上州から遊びに來た妻君の母親の三人暮しで、子供なんかいたのです。

「なんぼ嫁けた娘でも、私にはやはり子供に違ひありません。それに此の娘は七ツ坊主なんです」

「七ツ坊主？」

「はあ、實は此の娘は月足らずで生れたんです。弱いにも何も、たうてい育つことぢやない、お産婆さんもはつきりと仰言つてでした。でも私は諦め切れなかつたのです。弱ければ弱いだに、可哀想にと思ふ心、親心でも申しませうか、生きてゐてくれと日夜に案じ暮した擧句、有名な太田の吞龍様のお慈悲におすがりしたのです。髪を切つて七ツ迄吞龍様のお弟子にして頂きました。すると何うでせう、メキ／＼丈夫になつて。私は吞龍様

を此の娘の命の親として拜んでゐるのです」
と、お婆さんは涙を流して、長々と吞龍上人の御靈驗を語つて呉れたのです。私は笑へなくなりました。折から出た臘月を追つて、ソツト外へ出て見ました。流石に更ると冷々とする風に、軒々の枳殼の葉が生あるものゝやうに、ヒラ／＼と揺れてゐました。

「さうかなあ」

私はお婆さんの話を繰返し／＼心の中に刻みつけながら、歎息をついたのでした。丁度通りかゝつたお寺の御拜で、我知らず一生懸命に合掌しました。何時しか、私が幼い頃、可哀想だと云つて鼻汁を吸つてくれた信心深い祖母の婆や、懐しい在りし日の面影、遠く長崎に居る母のことなど、思ひ出してゐたのです。

二

「五兵衛が所の阿女ツ子、此頃變ぢやねえか」
「彼奴も取つて十六、無理もねえさ、そろそろ虫も付くべえよ」

「實はな、俺とこの娘もどうやら梅干が欲しいとよ。之もどうせ闇から闇へ……」

「さうとも、満更憎い譯のものでもねえが、こちとら其の日暮しの貧乏人、餓鬼ばかり澤山生れちや、子供も難儀、親は尙更食べて行かれねえだ。一人ありや良いと云ふものさ」
龍山の大善寺から、台命を禀けて大光院の開山となつた吞龍上人は、太田の里人のかうした話を耳にする度毎に情ないと思ふ心で一杯でした。

我れ一代の戦場を憶ふに、始終八九十合なるべし。萬死に一生を得るもの十八度、都べて厭離穢土欣求淨土の法文を帯びて、免かるゝことを得たり。故に今關東十八檀林を開いて之を謝す。子孫永々に淨土の宗門たるべし。

之は徳川家康の御遺狀御寶藏入百箇條の中の一條です。

家康は戦後の經營に多忙でした。同胞相食み骨肉相闘ぐ戰國の動亂を平定し得たとは云へ、民百姓の生活は困窮の極に達し、人々の

心は荒んでゐました。殊更ひどい關八州、之を何うしたら良いでせうか。そして賢明にも家康の取つた宣撫工作は宗教政策でした。家康は優れた武將だと云ふことは申す迄ありません。けれども剣を握つて尙ほ内に藏する切々たる信仰、之が彼の身上でせう。あの目まぐるしい戦場で、三河大樹寺の勢譽登譽兩師、そして江戸増上寺の觀智國師等から、教を受け念佛することを怠らなかつたと云ひます。どうも之が三百年の礎をなしたやうに考へられるのです。

慶長十六年春、家康は太政大臣に補せらるる旨の勅諭を賜りました。家康は之を拜辭しました。其の代り徳川氏の先祖である新田太朗義重に、鎮守府將軍の宣旨を賜らんことを奏請して、勅許を得たのです。そこで義重の菩提を葬はんが爲に、上野國新田の郡太田の地に一字を建立し、義重公の法號を取り、義重山新田寺大光院と名づけて十八檀林の隨一に數へ、三百石の御朱印を附されました。そして十八年、觀智國師の高弟として、學德

の聞え高かつた吞龍上人は、請ぜられて開山の聞え高かつた吞龍上人は、請ぜられて開山となられたのです。

太田の金山城は、源義國の居城で、其の子義重新田太郎と名乗り、新田氏と稱して以來、關東切つての名家として一族繁榮しました。殊に八代の孫義貞公は勤王の志厚く、元弘三年五月、護良親王の令旨を奉じて義兵を擧げ、兵を率ゐて鎌倉に迫り、稻村崎を渡渉して奮戦し、北條高時を誅して關八州に號令したのです。そして翌建武元年入朝して、楠正成等と共に建武回天の壯圖を完成しましたが、延元元年、遂に王事に倒れ、新田の一族は離散して了ひました。

爾來二百七十餘年、此の由緒ある新田の庄も打續く戦亂に民百姓の困窮一方でなく、風紀も亦紊亂し、若い男女が不義の結果、子供を宿せば直ぐに墮胎して、闇から闇へ葬つて了ふし、其れ位なら未だしも、夫婦の間に子を儲け、折角此の世に生を受けた者迄も、中以上の生活向の者は二人、中以下は一人あれば澤山と、無慘にも壓殺して、蟲一つ殺した程

にも思はないといふ亂暴極まる状態でした。

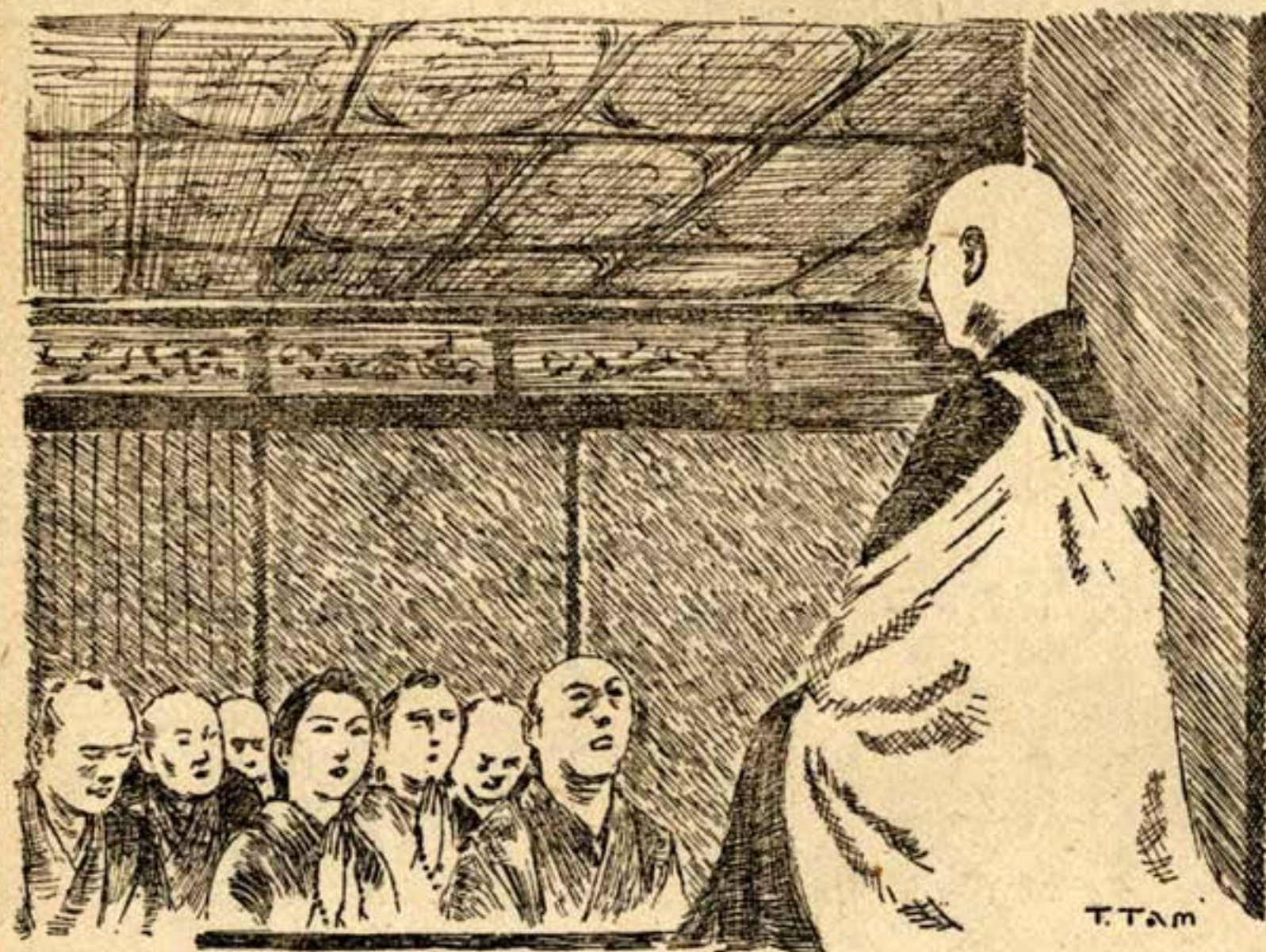
「皆の衆、良く聞かつしやれよ。一寸の蟲にも五分の魂ぢや。泥んや人間には佛性がありませんぞ。大切なは人の命、ましてや親となり子となる上は、盡きせぬ宿世の因縁と、子供は大切にせにやなりません。如來様のお子を殺めるとは、佛罰の程も恐ろしい限りぢや。

三途奈落の實苦に、栗立つ思ひがするぞ」

諄々と説く因果の道理、人々は燈明に照されたほのかな上人の溫顔を、吸ひつけられるやうに見つめて、ジツと聞き入つてゐました。

「皆の衆よ、罪の源は邪淫ぢや。淫心を以て人倫を破りなば、世を紊り人を苦しむ、此の世乍らの畜生道ぢや。犬猫にも劣らうぞ。泥んや懷胎十月の十相を説かば、先づ初月は一氣體中に孕まれ、混沌未分の位、其の形恰も鶏の卵の如く、神道にては國常立の命、佛法にては毘盧遮那佛、是れ不動明王守らせ給ふぞ。二月目には陰陽の二氣相和して一氣となり、獨跏の形と顯はれ、藥師如來守らせ給ふぞ。三月目には人倫の本身、一念始めて萌し、

三結の形となりて文殊菩薩守らせ給ふ。四月
目には地水火風の五輪悉く連
り、仁義五常の形、普賢菩薩守らせ
給ふぞ。五月目には六根手足五體
具はり、此の時より守本尊定まり
て地藏菩薩守らせ給ふ。六月目に
は好むところ欲するところ自然に
生じて、母の乳を吸ふこと凡そ三
石六斗といふ、即ち大慈觀世音之
を守らせ給ふ。七月目には御佛三
世の因縁壽命に鑑み、人間一生に
めぐる因果の小事の輪を、輪鋒に
刻みて授け給ふと申す。即ち彌勒
菩薩守らせ給ふ。八月目には阿修
羅菩薩守らせ給ひ、輪鋒は胞とな
り、九月目には胎兒生長して異念
を生じ、惡魔惡龍毒氣を吹入れ、
此の世界へ出生なさば、己れが魔
道へ引入れんと企む。さればこ
そ父母の所行所念に引かれ、善を
爲さば善人となり、惡を爲さば惡人となる。



せ給ふ。扱又當る十月には、愛染明王守らせ

極樂地獄の境とは此のことぞ。勢至菩薩守ら

給ひて、此世に生れ出づるものと申す。お解
りか」

「皆の衆、一人一日中八萬四千の念あり、念
念の所作皆三途の業とある。それに吾等如き
極惡人、たつた今懺悔して、彌陀如來にお頼
り致さば、臨終の夕、罪障忽ち消えて、安養
淨土に救はると、法然上人の仰せぢや」
疊みかけて説く懸河の辯、人々は恐ろしい
惡夢から覺めたやうに、ホツと溜息をついた
のでした。

かうして毎日毎日、懇ろに説き續ける上人
の眞情が、里人の心に通じない筈もありませ
ん。里人だつて子供が憎い譯でもないので
す。再びこんな罪を重ねまいと、上人の名號
を頂き乍ら、誓ふ者が段々多くなつて來たの
です。

けれども、困つたことには、背に腹は代へ
られないと云ふ、お米の問題です。

「拙僧の心に隨つてくれて嬉しく思ひます
ぞ。如來様も如何ばかり御満足ぢやらう。そ
れに就いては、此の坊には幸に將軍家から

香燈の資に宛てよと三百石の御朱印を頂いてゐるのぢや。子供の養育料として頒けて上げましょう。又信心の方々からの淨財も頒けて差上げよう。彌陀如來のお慈悲と頂いて、育てくりやれ。成長すれば自分で稼ぎもする。子供は殺しても、親を殺す子はないからう」

宗教と科學

蓮系織 先頃日本植物學會で東大農學部大賀一郎教授の發表したところによると雲雀山の中將姫が蓮系で織つたと傳へられる大和當麻寺の曼陀羅は實は蓮系織でなく絹系織でしかも織出したものであると云ふ。然しこの傳説によつて蓮系織は普く試みられてをつたもので各地の寺院にこれを傳へてをるものがあり、大賀教授自身も蓮系から織物を作り、誰れでも試みられると云はれてゐる。

鐘の音 田口渚三郎理學士の研究によると寺の鐘のあの弱々たる餘韻は釣鐘の表に付いてゐるいぼによるものだとのこと。

大御所家康公、將軍家の覺えも目出度い上人のお慈悲に、唯感涙にむせぶ許りでした。それだけではありません。

「若し足手纏ひの幼兒があつては、殺ぐこともならぬと云やるなら、男の子でも女の子でも、拙僧の弟子として、お寺に預けたが良し。一人歩きの出来る七ツになる迄、育て、進ぜようぞ」

そして上人は、食べるものも着るものも節して、多くの子供達を、我子のやうに慈しみ育てたのです。俗に云ふ、節へば立て立てば歩めの親心、眞實の親は尙更大切に育てます。片言混りの口を利く頃ともなれば、愈々可愛さも増して行きます。此んな可愛い子を今迄何故殺す氣になつたらうかと、後悔するにつけても、偏に吞龍様のお蔭と、我子に言ひ聞かせ、子々孫々に語り傳へて、上人の恩徳を慕ひ信心したとて、何も不思議ではありません。

今も尙は賽者の絶えない子育吞龍、七ツ坊主の由來を聞いて、私は枳殼の葉と夏蜜柑を、迷信と笑へなくなつたのです。

上人の數多い傳説靈驗の中でも、私の心を打つのは、孝子源次兵衛の話です。親の病氣を癒したいばかりに、國禁の鶴を殺して、其の生血を飲ませた大罪人、孝子源次兵衛を咥つて、御朱印寺の榮位を弊履のやうに捨て、源次兵衛を連れて捕手の目を逃れ乍ら、長手山、三夜澤から、山又山を奥深くさまよひ、遂に信濃路に入り、淺間山の麓、小諸の宿に佇しい破窓の月を眺むること實に五年に及びました。音のしないやうにと、木製の鉦で念佛されたと云ひます。

此んな事が、幾ら情深いと云つても、人間業で出来るものでせうか。

誓つて彌陀の安養界に到り
穢國に還り來つて人天を度せん
私には、如來の大きな御力としか考へられないのです。

短歌

興謝野晶子選



鹿兒島 田中英二

きり島の山のいたゞき見えすして
風をともしなふ雲いと早し

(評) 霧島山の荒天の景であらう悲しいとも
恐しいとも云つて居らぬが、十分そ
の意が現はれて居る。

飯田市 中山弘

清らかに雪解の水の流れつつ麥の
み青し伊那の山里

(評) 春の暁い信濃の山里の景を敘して快
い調子を作つてゐる。

大阪市 吉廣 聖生

樂しくも春の夜更けの雨をきくも
のかき終へて足れる心に

(評) 傷事を終へてうちくつろぎつつ夜半
に春雨の音を樂しんでゐる作者の満
足した心が讀者にも傳はるやうであ
る。

朝鮮 鹽江八年坊

病む床に寫經せし文字かぞふれば
三十萬を越えてわが生く

千葉縣 高橋美知子

榛さく裏山づたひ古さとのみ寺に
母の手をひきにけり

朝鮮 福田俊

星月夜あふげば涙ながれにき地に
うづくまるわれの悲しく

春雨や櫻のたれて美しく咲けるみ
墓に君は寝たまふ

山梨縣 伊藤久次

うぐひすをききつつ山の木の葉か
く今日此頃のがたつきかな

春風に誘はれにけんわが庭の梢は
青き芽をそろへけり

富山縣 藤田四三九

うつし世の光に逢ひしよろこびを
聲高らかに告ぐるみどり兒

大阪府 小山文二

ゆくりなくわが居合せて凱旋の極
をろがむ春の驛頭

埼玉縣 小沼清秋

いささかの荊にもいたく傷つきて
嘆く心をいかにしてまし

東京 宮崎柳

何よりも健かなるを喜ぶと其他を
云はず獨り慰む

横濱市 石川良雄

紅梅窓に明るく咲きそめて御堂の
春のひるのしづけさ

小倉市 益田牙谷

大方は移り行く世にかはらざるふ
るさとの山ふるさとの川

千葉縣 安田九翠

安房の海つのるはやてに里の灯の
消えて荒磯に牙ゆる月影

若松市 齋藤華舟

歌よむてふことを見まねて幾とせ
ぞけふわが歌の人にひろはる

兵庫縣 山本壽之

すめろぎの秋津島國まもらんと君
立ちますを見るぞうれしき

兵庫縣 西島春道

古里の夕がれひをばふと思ふ冷え
し大根をこよひ食みつつ

函館市 上杉靜山

書を讀めばよむほど迷ふこの頃は
おほせのままに御名のみ唱ふ

仙臺市 三浦順子

幾たりの子をうしなひていま残る
子の病ひみる老いし君かな

郡山市 安齋四郎

よき國のよき民として我等皆わざ

に嘯まん老も若きも

東京市 三野輪江雪
目さむれば車窓を染めて火の赤し

この大雪に家燃ゆるらし

雪解する曠野を西し東して敵うち
はらふすめらぎの兵

京都市 永田七郎
松葉杖力に強く立ちよるわが傷つ
ける兵の春

春に逢ふわが少女らよ世に出ても
書をよむすべはゆめな忘れそ

學びやを今は出でてでも心して聖の
道をふみなたがへそ

北海道 花田順住
ほのぼのと晴れゆく朝の霧の中す
すむつはもの道はてしなし

道端の芝生の上に初春の光を浴び
て遊ぶ子供ら

芝區 興芝しもろ
世の中を運の露と思ふなり濁るも
澄むも玉と見なして

投稿規定

官製はがきに一回二首以内
とし「南土」編輯部歌壇係
あて送ること

國際事情解説

★獨塊併合と

ヨーロッパの危機★

中田 一郎

一、どこに原因があるか！

近頃世界の人々をあつと言はせ
た最も大きな出来事は何か、それ
は又々ヒットラー・ドイツ總統に
よつて行はれた獨塊併合の大芝居
であらう、それも水際立つた手並
みで、ものの美事に成功したので
ある、世界中の人々は盡く「や
りよつたな」といふ一種驚嘆と畏
怖の念に打たれたに相違ない。

そもく世界大戦後ヴェルサイ
ユ條約に採用されたウィルソンの
民族自決の提案は、今にして思へ
ば多くの無理や缺陷を伴つてゐ
た、中欧問題、東歐問題が始終紛
糾してゐたのも當然である。ヨー
ロッパはあらゆる意味で編成替へ
をせねばならぬ土境場に立到つて
ゐたのであつた。

併合政策としてドイツが、特にナ
チ政權成立後ヒットラーが既に早
くから唱へてゐたことであつた。
その根據はドイツ人は結合して一
國に團結せねばならぬといふところ
にある、オーストリアの人口六
百七十萬といふものは、もとく
ゲルマン民族としてドイツ人と同
系統に屬してゐる、だから大ドイ
ツ國の建設には、兩國は一體とな
らなければならぬといふ説であつ
た。一方オーストリアにして見て
も、大戦後一轉して面積三萬二千
餘平方哩の一小國に成下つて了ひ
何處か大國の庇護を必要としてゐ
たのであつた。經濟的にも地理的
にも最も密接なドイツとの併合
は望ましいことだつたので、屢々
併合の提案が獨塊側から持出され
たことがあつた、併し常にこれを
妨げてゐたのはヴェルサイユ體制

の維持を希望してゐる列國の干涉
であつた。イタリーなどもこの中
に入つてゐたのだから面白い。國
内でも獨塊の獨立を維持しようと
してゐる一派もあり、最近ではこ
の派が政權を握つてゐたのであつ
た、今度問題のシュシュニツク前
首相の如きもその一人である。こ
の派は祖國戰線といふ名稱のカ
トリック教系の黨派を作つて、
舊皇室ハップスブルグ家の復辟
をも企ててゐた。同時にドイツに
ナチスが勃興して以來、オースト
リア國內にもこれに共鳴してナ
チ黨が建設され、事々に祖國戰線
と對立し、相争つてゐたのであ
る。

本年に入るや兩國の關係は次
第に風雲を孕んでゐたが、ドイツ
の壓力は漸次増大し、オーストリ
アは非常に不安な状態に陥つ

てきた、この状態を何とかして打開し、兩國國交の調整を計るため、ヒットラー總統とシュニツク首相との間に重要會談が行はれたが、これが所謂ベルヒツスガーデンの會見であつた。この會見の結果兩國の間に妥協が成立し、新らたにナチ派の首領インカートが内相としてシュニツク内閣に入ることになつた。塊國ナチ派の勢力はこれで非常に優勢になつて來たのである。

ところがこの會見後幾何もたぬ三月九日、シュニツク首相は突如として、オーストリアの自由獨立を維持するや否やを國民投票によつて決定するといふ聲明を發表した、これはナチ派にとつて豫期しない出來事だつた。思ふにシュニツク首相は當時

國內狀勢を判斷し、今ならばナチ派を壓倒して獨立維持派が多數

ころがこの判斷は全然誤まつてゐた。ナチ派の憤激は極點に達した、而もその勢力は豫想外に大



きかつたのである、ナチ派は國內の各所——

ウィーン、グラーツ、

リンツとい

つた都市で

一齊に反對

の示威運動

を行ひ、政

府の軍隊と

衝突して

國內は物情

を制し得ると考へて、この積極的政策に乘出したのであらう、と

驕然となつてきた。他方ベルリンにおいてもこの塊國側の攻勢に對

して緊急政策が樹立され、兩國の國交は正に一觸即發といつた危機に際會した。かうなつて周章てたのは塊國政府である。即刻投票延期を發表したがもう遅い、ドイツ國軍の精銳、ミュンヘン突撃隊は續々塊國國境に集結されると共に、ドイツ政府は次の三條件を提示してその實行を迫まつた。

一、シュニツク首相の辭職

二、ナチスによる新内閣の組織

三、ドイツ亡命中のオーストリ

ア・ナチ強硬分子の歸國許可

塊國政府はこれを拒絶したが、

最早や半ば棄針的な態度だつたと

いはれよう、これで一切の妥協策

はけし飛んでしまつた、ドイツ軍

隊は潮のやうに國境を越えてオ

ーストリアに侵入、ウィーンを始め國內各所を占領した、戦火を交

へても勝味のないのは解り切つてゐる以上、獨逸政府軍は全然獨逸に反抗を示さなかつた、獨逸軍は一發の銃火をも放たず、一滴の血を見ずにオーストリアに進軍出来た。

これと同時にシユシユニツク内閣は瓦解し、ナチ黨のインカート内閣が成立した、又ドイツナチの副總統ヘスト、航空相ゲーリング元帥の二人は相前後してウィーンに乗込み、獨逸の反ナチ派の彈壓ユダヤ人の彈壓を開始した、獨逸はかやうにしてナチ一色に塗り溢されることになつた、これが十一日のことである。

二、獨逸併合と諸列強

以上のやうな報導が世界各国に傳はると共に大變な波紋を呼起した、英國と佛國はドイツに對

し嚴重な抗議を提出し、事態の擴大を喰止めやうとした。事實この時になつても兩國が併合迄進むかどうかは未だ疑問視されてゐたのである、しかしヒットラー總統は一切の干渉を軽く一蹴し、斷呼として所信に邁進した。

十三日ヒットラーは總統令を發して獨逸合邦の法律を公布し而も即日効力を發する旨を宣言した、そしてオーストリア國民にこの合邦の賛否を問ふべく國民投票を四月十日に舉行することを宣言した。これに相應じて獨逸側からも同日獨逸合邦を中外に聲明した、この法律によれば獨逸は爾今ドイツ國の一州に編入され、又獨逸國軍隊もドイツ國軍に編入されヒットラー總統の命令下に入ることとなつた。

次いで十四日ヒットラー總統一

行は晴れのウィーン入りを舉行、翌十五日十萬のウィーン市民の前に合邦宣言の獅子吼を行つた。その趣旨は「オーストリアの舊指導者達はヴェルサイユ體制に自國を束縛せしめてゐたが、今や自己の使命に自覺し、大ドイツ民族共同體に忠誠を誓ふに至つた」といふのである。凡そ以上のやうな經過で、僅々數日のうちに、獨逸兩國の併合といふ大事業は完成してしまつたのである。

さて、繼つてこの併合を可能ならしめた外部的條件を考へてみよう、むしろ併合は非常に好都合な外部的條件があつたればこそ成し遂げられたともいふべきものである。一口にいへば、英佛に干渉の餘裕がなかつたことと、イタリーの好意的中立の態度に歸するであらう。

英佛兩國は元來現状維持派の國である、だからこのドイツの攻勢とその強大化には非常な不安を抱くわけである。ところで先づ英國として見れば、オーストリアの併合は餘り面白くはない、さりとてドイツと事を構へてまで争ふなどといふ氣力はさらにないのである、現實主義的なチェンバレン英首相は理想主義的なイーデン外相を罷免して、獨逸兩國と國交調整の會談を開始したところなのである。そこで自國の軍備擴張策などを樹立して一先づ見送つたといふ形である、英國に較べて佛國のドイツを恐れる念は遙かに強い、ドイツは合邦によつて七千三百萬の國家となるのである、佛國の輿論は沸騰した、對獨強硬策も唱へられた、だがいかにせん、自國の内部に問題は

山積して居り、これを措いて外部に手を出すことは到底不可能な有様であつた。だから英佛兩國は精々外交辭令を用ひた抗議の提出でお茶を濁さねばならなかつたドイツはこの兩大國の足下を完全に見透してゐたのである。

イタリーの好意的中立も大きなものであつた。從來獨伊の關係は、オーストリア問題を繞つてはどちらかといへば利害相反する立場にあつた、イタリーはドイツの獨國併合には反對だつたのであるところが日獨伊防共協定の成立と共に、所謂ベルリン、ローマ樞軸が完成され、爾來兩國は水魚の交りを結ぶに至つた。今度の事件にもヒットラー總統とムッソリーニ首相との間には、豫め緊密な了解が遂げられてゐて、イタリーは終始ドイツの行動に對

して好意を寄せてゐたのである。今のイタリーにとつては、オーストリア問題よりはベルリン、ローマ樞軸を強化して、エチオピア問題、スペイン問題、地中海問題等にドイツの支持を期待する方が遙るかに必要だからである。

ソヴェート聯邦もドイツの強大化を懼れてゐる以上、この合併には勿論反對だが、これ又國內事情もあり、戦争回避の平和政策を建前として居り、積極的行動に出ることは不能であつた。アメリカは最初からこのヨーロッパの事件を對岸の火災視して靜觀を續けてゐたのである。大略以上のやうな情勢で、イツの機敏な押しの一手がうまきまつたのである。

三、これからどうなる

だが問題はこれで片付かない、この併合の結果中歐にある弱小國家——所謂小協商國等の間には大變動が齎らされるのである、中にも國內に三百五十萬のドイツ人を含くみ、國境の過半をドイツに取り圍まれることになつたチエツコスロバキヤは大恐慌である。又ハンガリー、ルーマニア、ユーゴスラビヤ等にはドイツの壓力が加はり、親獨政策への轉換も見られるであらう、佛國はチエツコとの相互援助條約の確守を宣言してこれに對抗してゐる。この外バルチック沿岸では舊獨領メーメルにドイツ併合運動が起つてラトビア、ポーランド、ドイツ間に紛争を齎らさんとしてゐる。かうした有様はさながら大戦前を彷彿せしめるものがある。結局各國は益々軍備擴張に拍車を驅け

次ぎに来るべきものに備へねばならなくなつてゐる。ヨーロッパは正に危機にあるといはねばならぬ。(寫眞はハイル・ヒットラーの歡呼を浴びつゝ、ヒットラー總統のウイーン入り)

雷 嫌 ひ

妻「ゆうべは随分ひどい雷でしたね」
夫「雷だつて？ 何故俺を直ぐ起さなかつたのだ。お前は俺が雷が鳴ればとても眠て居られないつて云ふ事は、良く知つてゐた筈じゃないか」

仕事

伯父「何に事によらず仕事と云ふものは下からだん／＼仕上げてゆかねば成功しないものだ」
與太郎「ちや伯父さん、穴を掘る時は一體何處から始めませうか。」



立志 講談

出世高虎

一龍齋貞丈
大羽四郎畫

お求めに應じまして戰國成功談を一席申上ます。江州犬上いぬがみの郡佐和山さわやま、磯野丹羽守いそのたんばしゅの領地、藤堂村に鍛冶職かじ百姓ひやくしやうを業として居た興右衛門きゆうゑもんといふ若者わかしやう、武士を志こころざして國を飛出し、途中で買求めました黒木織くろぎの紋付もんづき、朱韃しゅたの大小おほきちやう、どうやら武士姿さむらいずかたになり、城を見みると興右衛門きゆうゑもん賣込うりこみを初めた。

興『御當家ごとうけへ仕官しこうな仕り度つかまつく罷り越した、御重役方ごぢやくかたへよろしく御披露願ごひやうねんひ度い』

取『して御姓名ごせいめいは』

興『されば……』と言つたが百姓が本業ほんぎふ、姓も名乗りも無い、思ひついた生れ故郷なまこころの藤堂村ふでどうむらをそのまゝ、

興『されば藤堂……興右衛門……高、高虎と申する者でござる』

連襲れんしゆながら是で立派りっぱな名が出来上りました。名前なななんといふものは其の人ひとが偉ゑいくなつて終ふと立派りっぱに聞えるもので、太郎たろう、權兵衛ごんべゑ、權助ごんすけでは餘り偉くも聞えませんが、其の上に桂けいとか山本やまもととか林はやしとつく立派りっぱになるものです。

取『藤堂興右衛門殿ふでどうきゆうゑもんどのと言はれるか、して御職功ごしやくこうは』

興『拙者しやくしや残念ながら未だ戰場せんじやうの土を踏まず、是と申す功名こうめいはござらんがイザと言へる時は

一番槍一番首は他人に渡さぬ積りでござる』

取『イヤ御戦功がなければ當家では残念ながら足輕では如何』

與『足輕……御免蒙る、拙者足輕と唐茄子は大嫌ひでござる』

ブン／＼怒つて飛出したが、何處へ行つても戦功のない者は足輕より外、召かゝへて呉れません。其中、用意の金子を費ひ果し無據、

攝州尼ヶ崎、織田七兵衛信澄の許へ足輕と住込みました。誰かよき相談

相手をして一人欲しいものと同輩を見渡すと、茲に井合孫作常長といふ

人物と肝膽相照らす仲となりました。或日二人は仲よく飲み合つた後

與『なア、孫作、人にはそれ／＼望みのあるものだ、今日は一つお前

の望みを聞かせて呉れんか』

孫『笑ふなよ、實は俺の望みは槍一筋の主になり度いのだ』

與『ハ、ハ、ハ、小さい望みだな』

孫『ナニ小さい……然らば與右衛門貴様の望みを聞かう』

與『俺の望みはチト大きいぞ、まづ一國一城の主になりたい』

孫『ウワハ、ハ、ハ、大名に……蟹は甲羅に似せて穴の蟹、分を知れ分

を知れ』

與『成れん事があるものか、只今江州長濱に於て二十萬石織田の家來

羽柴筑前守秀吉は尾州中村の士民ではないか、又主人たる信長は何ん

だ。足利の執事、斯波に仕へた信秀の子息だ、それが今日の如き廣大

なる領地を得た、泰平の世ならいざ知らず麻の如く亂れた今の世、吾

吾武士にとつては得難き好時節、何うだ股鎧遠きにあらず、近きにあ

り、孫作判つたか』

孫『大そう能書を並べたな、今度は俺が貴様に言ふことがある、天の

時は地の利に如かずといふ事を知つてゐるか、是は人間居所が悪いと出

世をしそこなふといふ事だ、秦の始皇に仕へて丞相になつた李斯は楚

の國の生れであつたが弱年の頃小役人を勤めて居た、一日厩に入ると

鼠が汚物を食して居た、その足で米倉へ行くと一匹の鼠が米を食つて

居た、それを見て李斯は同じ鼠であり乍ら汚物を食ふもあれば五穀の

長たる米を食ふ鼠も居る、鼠ですら居る場所によつて斯の如き損益が

ある。人の賢、不肖は天より授るといふものゝ一つは身の置くべき處

に據つて幸不幸があると、それから小役人を辭して楚の國を去つて賢

者に從つて教へを乞ひ、遂に始皇に仕へて彼一代に丞相の榮官に昇進

して一度天下の實權を握つたといふ、どうだ分つたか與右衛門、結局

此處にいくら居ても望みが無い、吾も是から先は米倉の鼠になつて

大いに肥え太らうではないか』

相談が纏つて新しい主人を探し、尼ヶ崎を飄然として立去りました。

足にまかせて歩く中、主取りもしないのにモウ兩名共囊中無一物。

孫『ア、腹が空つた、囊中自ら錢ありと唐詩選とかいふ唐人の寢言

の中にあるが是は囊中自ら錢なし……風も一段と身に沁みるぞ』

與『ハ、ハ、ハ、意氣地なし奴、今少し我慢をしろ』

伊勢四日市餅屋の三五兵衛の前、

與「孫作、腹が空つては戦が出来ぬ、考へを後にして取敢ず食ひものにありつかう」

孫「與右衛門大丈夫か」

與「マアいゝ隨いて來い。許せ」

主人の三五兵衛見ると立派な武士が二人

三「いらつしやいまし、何をさし上げます」

與「何んでもよい、端から持つて來い」

二人競争で食ふく、

孫「時に與右衛門勘定は大丈夫か」

與「心配するな、コレく親父」

三「へエ」

與「一寸是へ來て呉れ、實は吾々懷中に一文の蓄もないのだ」

三「へ……御冗談を……」

與「イヤ冗談ではない、正真正銘の一文なし、如何であらうか、あやまるから勘辯して呉れ」

三五兵衛吃驚した。

三「ハア、謝罪は新手でしたナ、でも正直によく仰言つて下さいまし

た、後出世遊したらお拂ひ願ひませう」

與「恭けない、此の恩は生涯忘れん、どうだ親爺、事のついでだ明日

から又困る兩人、いくらか錢を貸してくれんか」

乗りかゝつた船と主人三五兵衛、ルンペン武士に金子を貸與へた。

三五兵衛はいゝ人を世話しとききました。

(十有餘年の後大名と出世なした高虎は昔日の舊恩忘れ難く黄金

五枚白衣十四、米三十俵を其の節の禮として三五兵衛に與へまし

た……これは後の話)

兩名はあれから東海道を順に下つて江戸表、是といふ勤め口も見當

りません。更に奥州路へやつて參りました。日本三景の一、松島。

孫「矢の如き光陰早三年、今浪人の身で松島の景色を見ようとは思は

なかつた。一日も早く出世したいな」

與「孫作貴様の望みは槍一筋の主と申したな、結局貴様は二千石三千

石の主になればそれでよいのだらう……なまじ氣心の知れん主人を持

つよりどうだ、此の高虎、近い中に大名になる、さうしたら貴様、己

の家來となつて生涯を終れ、悪いやうには致さんぞ」

見るく孫作の顔の色が變つた。

孫「黙れ與右衛門、十年莫逆の友を如何に親しき仲たりとも、家來に

なれとは何事だ」

與「ハ、怒つたな……今のは冗談だ」

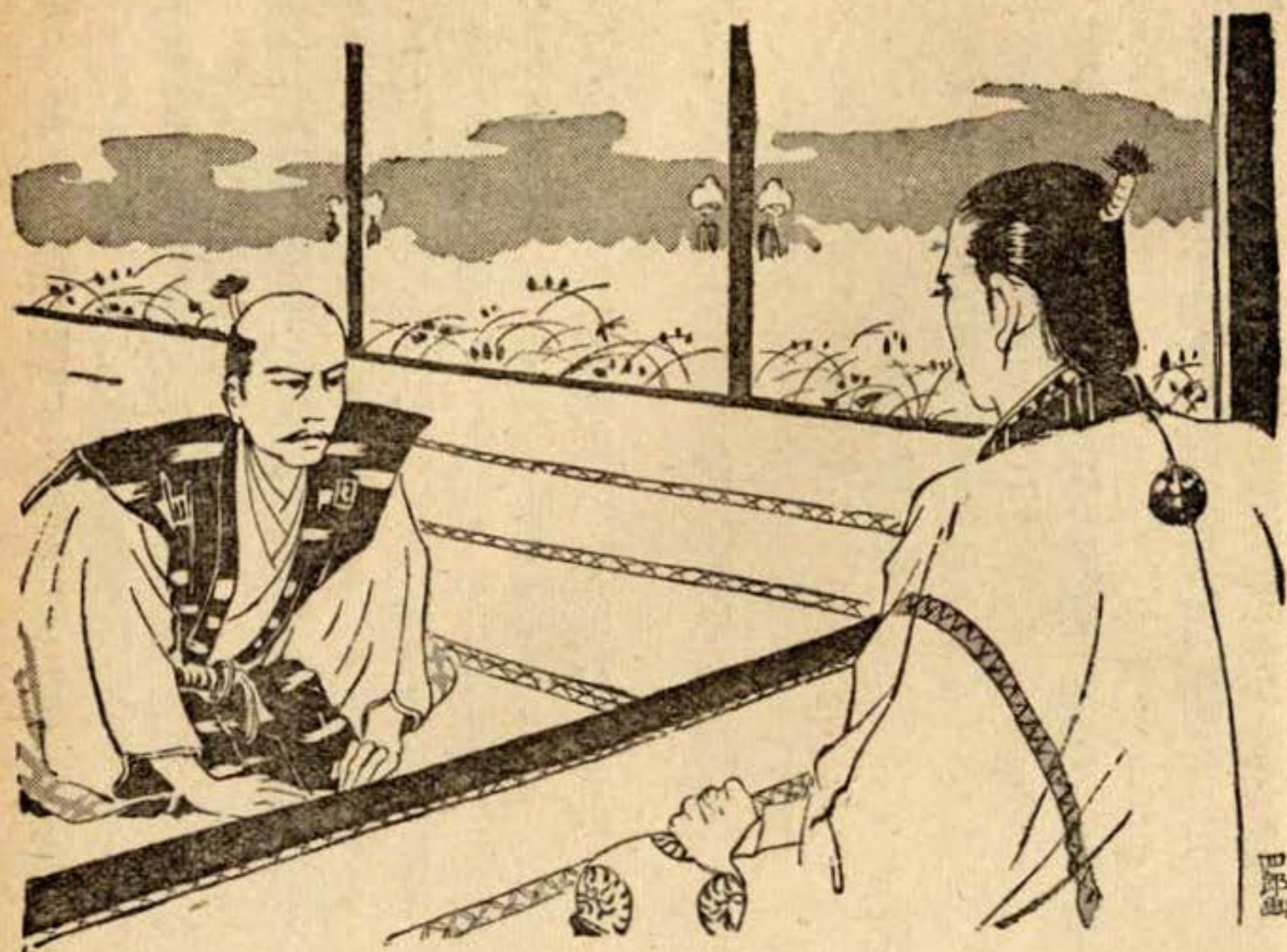
孫「イヤ冗談とは言はさん、男子一度口外なしたる事は驕馬も追ふ事

能はず、心に常に思へばこそ口にも出た今の一言だ、心安だてとは言

はさん、貴様には長い事世話にもなつたが今日限り別れよう」

與「孫作、本當に怒つたのか……さりとては氣の小さい、なれど拙者が

悪いのだ、此の通り謝る勘辯してくれ」



四郎

孫「嫌だ」

與「是程詫びてもか、……然らば貴様の望み通り別れやう……後日その短慮を悔ゆるなよ……さらばだ」

孫「待て與右衛門」

與「今更用はあるまい」

孫「イヤ、一言別れに望んで申置きたい事がある。貴様が高言の如く一國一城の主となつたなら、某、如何なる所に居らうとも、必ず尋ね、貴様の馬の轡をとりに入るぞ」

與「ウム面白い、その誓約忘るなよ」

孫「武士に二言はない、さらば」

與「さらば」

餘程虫の居所が悪かつたか、千金にもかへ難い良友を失ひました。

井合孫作は、從三位の宰相、後に近江國小濱に於て五萬石、京極若狹守高次に仕へて三千石家老上席に出世致しました。

思ひは同じ藤堂高虎、秀吉の弟、荻柴小一郎秀長に仕へ二百石、迎も當座は井合の敵ではありませんでした。

茲に天正十年六月二日本能寺に信長倒れ、同月十三日山崎の弔合戦、逆賊光秀を討つて兵馬の糧は秀吉が掌握致しました。

此の山崎の一戦で與右衛門功を立て一躍七千石を賜りました。續いて秀吉、關白となり弟秀長は大和郡山の城主として百二十萬石、大和納言、乃で高虎益々信任厚く一萬二千石、今一息で城持といふと

ところで秀長薨去、秀俊が相續しましたが間もなく早逝、後目相續人がなき爲にお取り潰し、高虎は主家滅亡の爲、扶持に離れた世捨人、ひたすら世をかこち高野に登つて出家なし雪山、秀長、秀俊の靈に仕へ居りました、秀吉は高虎の忠誠を傳へ聞き、
『主家の爲出家得道致せしは洵に義に厚き彼の志、天晴れの者再び世に高虎を出せ』

と下山を勧め、茲に改め袈裟衣を脱ぎ捨て伊豫大洲に於て五萬石、佐渡守と任官なし、從五位の下朝散太夫、與右衛門望み通り一國一城の主となりました。或一日。一間に書見の高虎、

取『申上ます、只今昔の友、井合孫作と申する御人お見えにございます』

高『何！孫作が参つた』と思はず立たんとなしたが元の座へ

高『して扮装は如何である』

取『大層御立派やかなるお方にございます』

高『オ、左様か是へ通せ……早う致せ』

待てば程なく、案内に従ひ入り来る孫作

高『オ、孫作、よう訪ね来てくれたな』

思はず走り寄り其の手を固く握れば、孫作静にふり拂ひ、疊四五疊飛下り、

孫『ハ、ッ高虎殿には麗しき御尊顔を拜し、孫作恐悦を申上ます』

高『コレ／＼孫作、その固苦しき挨拶は無用に致せ、何故、昔通り與

右衛門無事かと言ふて呉れぬ』

孫『仰せ、尤もなれど、伊豫大洲に於て五萬石一國一城の大身、昔は昔今は今、盡すべき禮節をつくすは』

高『イヤ／＼相分つた、一言の禮儀はうけやう、それさへ済めば昔の友、コレ／＼酒肴の用意致せ、孫作寛ろげ／＼』

孫『如何さま、然らば仰せに従ひ昔のまゝで』

高『此の方より望む處——孫作、久しう逢はん中に大層頭は越路の雪と相成つたな』

孫『與右衛門御身も額に青海の波を見せ、大層年取つたなハ、』

高『お互ひに思へばあの時分は若かつた』

孫『貴公もと／＼法螺を吹き當てたな……時に今日改めて御身に頼みがあるが聞いてくれまいか』

高『オ、何んなりとも孫作遠慮なく申せ』

孫『御身の馬の轡を取らせてくれまいか』

高『エッ』

孫『忘れも致さぬ、十餘年前、松島で御身と誓約なしたアノ一言叶へさせてくれ』

高『オ、あの時は此の高虎の戯れ』

孫『イヤ御身は戯れに言はれても聞いた孫作は八幡正氣』

高『して孫作、御身は今日まで、何處に居られた』

孫『されば九牛の一毛なれど、小祿ながら京極高次の家老職三千石、

誦する心經

(現地より)

淨土宗從軍僧

白崎 嚴成

「同行は二人」と帽にかきつらね不惜身命われ征かんとす

み佛のみむねかしこみ幾千里江南北支使すわれは

上陸を敵前にする兵たちよみな安かれと誦する心經

み佛の加護にしあらむ今日もまた百のつはもの缺くるなし百

怨愛はふたつあるなし敵兵の骸懇ろに葬り禮す

彈丸ぬちに數珠一連をにぎりしめ念佛申するわれ強きかな

眞白木の位牌ひとつを抱きしめわれ泣きぬれて南京入城

聲にして念佛申する力なし桐の小箱のやまとつままるる

畜生とおもひな給ひそひれ伏して「日本軍馬の墓」ををろがむ

英靈よ安けく眠れ飄揚と五色の旗は春空たかし

秋彼岸またで征でにし我なりき春の彼岸も北支に迎ふ

投げ捨て参つたも御身の執約果さん爲、又二つには懐しい御身の體も
見たいと思ふてナ」

高「然らば當家に於て五千石家老上席として……」

孫「イヤ／＼其儀はお断り申す、當家に於て高祿を頂戴致しなば、ア

レ見よ井合孫作は祿に目がくれ藤堂家に走つたと人々から後指さされ

やう、此の常長の武士道をたてさせて呉れ、……御身の轡を取らせて

呉れ」

高「然らば御身の心まかせに致されよ」

孫「叶へてくれるか、……之で身共の武士も相立つた、よき主人を得

て孫作も満足、今日より改め忠勤つくし……」

高「イヤ／＼仕官は明日から、せめて今宵は昔の友……孫作」

孫「いかさま與右衛門」

と秋の長きを夜と共に語り明し、其の翌日より新規お雇、四石二人

扶持、特別手當五千石、日本一の馬丁が出来上りました。

天正二十年改めて文祿元年、朝鮮の役の砌り井合の働きにより敵船

六十艘を奪ひ、其の功により藤堂家は十五萬石。

更に關ヶ原の折は徳川の味方なし石田の軍を破り、後伊賀の上野、

伊勢の津兩城兼帯の主、西三十三ヶ國の旗頭、從四位の侍從藤堂和泉

守高虎と出世なす。

其の陰には井合孫作常長が己れの身を埋木として昔の友、與右衛門

の爲に働いたといふ武士道の體鑑、題して出世高虎の一席。

婦人と家庭の浄土

女性性評論 國家總動員と婦人

高梨花子

女性性評論

パーマネント、ウエー

ブが禁止になると言ふ話が出たら一度やつて見たいと言ふ若い婦人が随分あつたとか。日本の國民全體の生活が今日ほどに緊張してゐる時はない、然しその生活がすみずみまで、たゞ形式的に非常時色で染められたからと言つて、無意味だと思ふ。國防婦人會や愛國婦人會のめざましい奉仕運動は私達の誰でもが知つてゐる。たゞ同じユニホームを着たと言ふだけでは意味がない。日本の未曾有の重大時局、

日本の婦人全體の運動が今こそ統一ある指導の下に新しい形態と國民思想に基礎を置いて展開されるのが期待される。新國民運動の一つの翼として日本の婦人の運動が大きな力になることを望むのは筆者のみでないであらう。

婦人の運動と言ふとたゞ婦人の立場とか、婦人の要求だけを掲げる運動を考へるけれど今はそんな時代ではない。婦人の活動が展開されることで全體の國民運動が高められるような運動

讀者の皆へ

一、女性評論(二百字づつ五枚以内)
二、信仰家庭電話(同上)

右の通り募集します掲載の分は薄謝を
呈します

でなければならぬ。新しい生活運動だからである。それは全體に生活を時局の要求と發展につれて高め、進める運動であるからである。それは廣義國防の線に沿ひ、國民精神總動員の線に沿ふて行はれる運動でもある。今こそ婦人が先頭に立つて新しい生活運動を始めることである。新しい生活運動とはこの未曾有の時局に實際役に立つ生活創造の活動である。それはただ従來の婦人運動が犯して來た形骸的要求を掲げることではなくて眞實に人間の魂にふれる問題に就てである。魂の問題、人生の問題、これこそ現代日本の婦人が非常國民の母として眞剣に頭を向けるべきであらう

三年たてば 役立つ塵

— 母の言葉から —

亂暴に物を投ふ私に對して、『三年たてば塵だつて役に立つものだ』と母はよくこう言ふのでした。

三年と言ふ期間、塵と言ふもの、それはいかにつまらぬものでも、そのうちには必要になると言ふ意味である。

母をけちな、もの惜みをする性の様に思つてゐた私も年を取るにつれてその意味が分る様になりました。誰も経験する事すけれど、その時は不都合な邪魔物でも、時にそれがなくてはならぬ場合があります。

或嵐の夜の事でした、雷鳴にお



衛戍病院を訪ねて

貞恭婦人會

渡邊認子

門衛屯所の後の病舎の窓から半
身を乗出して「さよなら」を連呼
しつつ、手を振つて居た傷兵の、
頭部をクル巻くにした眞白な繻
帶姿が、軍病院の慰問を卒へて歸
途につく私共の網膜に消えがたい
印象となつて、營舎を巡つてだら
／＼下る坂道の兩側に高く枝をは
る築地の上の櫻を見上げ乍らもい
つた、

「又櫻咲く時分是非來て下さい」
と云つた係の伍長さんの事を思ひ
かへして居た。二十年前の兵隊で
すとの言葉に改めて其の顔を見直
したほど若々しい其の伍長さんは
「此頃はさつぱり慰問の人來ま

せん。やはり人氣と云ふものでう
か：：まだ上海戦がボケツト地帯
で激戦中はこゝも慰問が多すぎて
困つた位でしたが」とも云つた。

私共は、それから間もなくバス
の乗場から少し離れた市川のほと
りに立つた。そして何かなしに疲
れた身をその堤に憩はせつゝいつ
までもヒタ／＼と打寄せる川波の
幽かな音に、春淺き訪れを感じ乍
ら考へた事であつた。

あの明治十八年と云ふ古い歴史
をつゝんだ頑丈な黒い木造の建物
に早春の陽ざし和やかな前庭の芝
生の上で會員の可愛いお嬢さん
等が。レコードに合せて踊つた、

露營の歌に涙ぐみさえして幾度も
アンコールを續けた輕傷の患者さ
ん其の小さいお嬢さんを相手に折
紙を幾つも折つてはベツトの上に
ソツト並べていた隻脚勇の士。

三年：：五年：：十年と平和が
蘇つてからの勇士等の長い半生を
思ひ、戦ひ始つて僅に半年餘り、
もうそこに人氣と云ふ言葉を以て
語られる世間の動きを考へる時、
丁度風のまに／＼打よせる其の川
波にも似たかりそめの深いわびし
さを思ふ。

勇士等の尊い犠牲はその前途長
い一生にかゝつてゐる。私共の感
謝が、感謝の表現が、戦ひの最中
丈けでよいものであらうか。

かりそめの世の動きの中に深く
透徹して、これ等勇士等の上に感
謝とを以て、其の多幸なる將
來を祈らなければならぬと思ふ
のは私共だけであらうか。

びやかされてゐた矢先き物凄いい稻
妻にヒューズが切れたのでせう、
パツたり消えた電燈にとまどひし
てしまひました。

茶だんすの小抽出に二三年前に
入れて置いた古い荷札の針金が思
ひ出されました。里には遠い一軒
家の、明日朝まで暗やみに居ねば
ならぬのに思ひがけぬ古荷札が役
に立つたものでした。

こんなものがと思はれる邪魔物
でも量ばらぬ様にうまく整理をし
ておいたら随分と不時の役に立つ
ものだといふ思はされまし
た。

家庭に平和を

獨身者「あゝ俺には結婚生活の
幸福と落付にあこがれてゐる」
既婚男「俺の憶れてゐるのもそれ
だよ。」

信 仰 の 道

醫學博士

和田正策氏

「和尚さん、少しお尋ねしたいのですが」こう切り出された住職のS師は、讀經後、開き直つた和田博士の質問に緊張した。

「あなたの讀經をきいてゐますと、何の不安もなしに、大へ心地よくきこえるのですが、あなたは本當に安心の境地を得てゐるのですか」

實に眞面目な聞き方である。受け取り様によつては、今の坊さんには痛い皮肉とも取れよう。事實師も侮辱されたと瞬間思ひはしたが、博士の眞剣な面持に、眞實を語る義務を覺えるのであつた。

「いや、實は少しも信仰なんてありませんよ、お寺に生れたばかりにこんな事をしてゐるのです、……然しこれではいけない。何か眞實の道とでも言はうか、自らを欺かない、信仰の道へ入りたいとは努力してゐますが……」

僧侶としてはめづらしく眞實の告白である。S師もこの人なら、と思ひ切つた言ひ方で、自らの心の裏をさらけ出したのだ。

語る人、語られる人、柵を切つて流れる赤裸々な二人の魂が、相倚つて眞實のよろこびの中に溶け合ふ瞬間とでも言はふか。

S師の語は眞實でほてり、博士の瞳は歡喜に輝いてゐた。

「それで私も安心しました。私は、これ迄長い間信仰への道をひたむきに歩みながら、今だに安心の境地に到らずに、自分の業の深さ智慧の浅さに悲觀してゐたのです。

私には佛性もない、いくら聖業をはげんでも、所詮は、凡夫の悲しさで、生活信仰の境地に到れないとあきらめてゐました。でも坊さんのあなたでさへ信仰の道程にあると聞きまして、これからだと言ふ勵みも出て、安心しました。」

和田博士の語る信仰の道はこうである。

博士は以前から醫學に精進しながら、一方美術に關する造詣も相當深められてゐた。

それは大正七、八年の頃であつた、京へ旅行の折、大森の廣隆寺に立寄つて、その推古時代の佛

春宵朗詠

奈良 辻 虎次郎

(一)

和やかに むすびの夢も
今醒めて 鶯啼くや
梅が枝に 徐ろ懐かし
その聲は ほうほけきよう

(二)

さくらばな 春酣と
咲き匂ふ 今は樂しき
日曜も いづこ選ばん
はいきんぐ いざやもとめん

(三)

山鳩の 驚きたてて
飛ぶ音の 行方ながめて
里山に 親子の禮儀

(四)

うへとした とまるゆかしさ
美しく 咲きたる花の

像を觀賞した事があつた。特にその御顔をながめてゐる間に、圓満な相好、巍々たる慈悲の光に、心打たれるものがあつた。「こう言へば平凡ですけど、求める心にピッタリと吸ひつく佛の無限廣大な佛力とでも言ひませうか……」

博士の言は決して平凡ではない。神の啓示と言ふか、佛の覺の瞬間と言ふのでもあらふ。言表しては平凡になるが、尊い成正覺の一瞬であつた。

「これだ!!」こう心に叫ぶ博士の氣持がはつきり分る様だ。

この麗しい佛像の姿の様に、泰然自若、而も、柔和な慈悲の相好に似た自分の信仰の將來に或る法悦を博士は感ぜずにはゐられなかつた。

それから此後の生活こそ和田正策氏の轉心の半生と言ふべきであ

らふ。

醫は仁術であつても、現代の醫師は職業であり、生計の道である。

而も科學は人間の生命を或程度しか喰ひ止めてはくれない。

そうした所に人間和田の煩悶があつた。自らの財を捨て、かくれば、仁術である醫業に殉ずる事は可能であつた。然し科學の力で如何とも出来ない病の前に、しばし博士も施す術に迷ひ、そこにこそ精神の力、信仰の大力が要望せられた。

或時、肺を病む青年の枕邊に立つた博士の目には絶望を告げる烈しい憐愍の情が湧く。

然し死の魔は眼前に迫つてゐる。やがて死する命の前に、どうして「癒る」と嘘偽が言へよう。

苦しむ病の身も辛いであらふが、命を預る醫師の身も又斷腸の思で

ある。

「精神の力だ!! 精神療法こそ最大の醫術だ、これこそ信仰の道によつてこそ始めて完成されるものだ!!」博士は始めて究極の醫學、醫術の道を指し示された様な興奮を感じた。

信仰への道は、始めて闊然と開けて行く、白道さながら曉の明星と共に次第に明るさを増して行つた。

醫學書と共に其の量を増してゐる博士書齋の佛書の數は、識から來た力強い博士の信仰を物語つて餘りがある。

僧を職業とする坊さんも顔負けするであらふ。

數ある祖師の中で、博士は、元祖法然上人の靜寂そのものゝ廣闊な御性格に歸依してをられる。知恩院に詣ては上人の廟に額づき數

ながめにも 彌陀のお慈悲は
偲ばれて 頓て近づく
極樂の 華の臺か

(五)

浮世をば しのぶ心は
みほとけの 誓にかなふ
御教へと かねてききへし
諭しをば いざやまもらん

(六)

憂きことも しのべみなひて
ながからぬ いのちながらへ
みほとけに つかへまつらん
御名唱へ 朝な夕なに。

斯洛涙にむせぶ博士の姿は神々しいまでに信仰人の落つきを見せるのである。

語れば薄れる信仰者の行狀である、博士はこの信仰への道を心なき記者がものした事を知つて、微笑せられることであらふが、御諒承が願ひたい

出征 美談

村の模範青年

鶴 田 湛 泉

一、人命救助

あの關西地方を襲つた空前の大風水害の起つた朝のことである。

近木川（大阪府泉南郡）には、濁流が奔騰しながら流れてゐた。

川上から流れて來た根から引き抜かれた大木が、橋脚にひつかゝると、流れて來る大木が、相次いで引つかゝつて塞を作つた。その橋は、頭丈な鐵筋コンクリート造りだつたので、流れ落ちず水が塞かれ、濁流は狂つた野獸のやうに、堤防を越し初めた。

またゝく間に、邊は一面濁水の海と化した。近くの畠中村の人家にも浸水し初めた。

この浸水に驚いて、人々が立ち騒ぐ中に、「助けてくれえ！」

と叫ぶ聲が聞え出した。

村人が、聲のする方に馳けつけて見ると、

それは、橋の彼方からするのだつた。川向ふにある三軒の小さな家は、水に吞まれて、今にも押し流されやうとしてゐるではないか。

「助けてくれえ！」

「助けてー！」

根限り叫ぶ男女の悲痛な聲が、人々の耳を劈く。而し橋の上の物凄しい流を流めては、恐れをなして、誰一人として助けに行かうとするものがない。

その中にも、危険は刻一刻と迫つて來た。

その時、突然

「僕が行かう！」

と、凜然と叫んだのは、杉岡治青年だつた。人々は驚異の眼を見張つた、それより、何か

でグワンと頭を叩かれて、我に返つたと言ふ方が適當であつた。

やがて、誰か持つて來た祭の地車を引く綱で、我が身を固く縛りつけ、綱の端を人々に引つ張つて貰ふと、決死の色を眉間にたゞよはした杉岡青年は、濁流の中に入つた。

橋の中程の水は、胸まで没する程だ。

掬はれさうになつて、よろめく足を踏みしめながら、困難さうに遅々として歩んで行く。

命の綱をしつかと握りしめた人々は、まばたきもせず杉岡青年を見守つた

やつと渡り終つて暫くすると、老人夫婦を

抱へた杉岡青年の姿が現れた。

この姿を眺めて、人々は思はず喊聲を放つた。

杉岡青年は、我が身を縛りつけてゐた綱を堤防の松の木に結付けると、老婆を抱へながら、綱をつたつて引き上げて來た。再び戻つて、今度は老人を救ひ出して來た。

杉岡青年のこの鬼神を泣かしめる決死的な勇敢な行動によつて、逃げ遅れた老人夫婦は

無事救はれることが出来たのだつた。
間もなく、三間の家は流出してしまつた。

二、先祖の墓へ訣別

昨年八月中ばの夕方だつた。

畠中村の長樂寺住職信鳳瑞師は、門前で涼みながら、夕刊を讀んでゐた。

「和尚さん、一寸お願いがあるんですが」

との聲に、夕刊から目を外らすと、其處に青年が佇んでゐた。

「私は杉岡ですが」

「ア、さうでしたね、頭が變つてゐますので、つい見外れて失禮しました。」

いつも美しく分けた美髪は、丸刈となつてゐたからだ。

「實は、今度出征することになりました」

「おめでたう。大いに戦つて来て下さい」

「少しお願があつて上りました。」

「ハア」

「戦地へ行く前に、是非御先祖の墓へ御暇乞」



をして行きたいと思つてゐます。而し寺へ

しいことながら、先祖の墓を存じませんので、教へて戴きたいと存じます。」
と慇懃に頭を下げた。そして、家人に氣付かれないやうにするため、特に夕方來たとの事であつた。

杉岡青年の言葉に、信師は、浮遊な青年の多い世の中に、何と言ふ立派な心掛の青年だらうと感激せずにはゐられなかつた。

やがて信師は、青年を墓地に案内した。

「これがあなたの御先祖です」

「ハイ」

杉岡青年は、教へられた先祖の墓の前に、合掌し瞑目しながら、暫しの間、ちつと祈念してゐるのだつた。

その眞摯な姿を眺めて、深く胸を打たれた信師は、涙ぐましい感動さへ催して來た。

かうして、杉岡青年は、先祖の墓へ訣別を告げると、次いで親族の墓へも同じよ

うに、禮拜するのだつた。

「本堂に上らして戴きたうございますが」

墓地を出ると、杉岡青年は、さう頼みにく

さうに和尚に頼むのだつた。

「どうぞ、お参り下さい」

信師は、よろこんで本堂に案内すると、本

尊前で、暫し黙禱してゐたが、そこら邊を物

珍らしさうに眺めて、やがて歩み寄つて来た

のは、掲げてある一葉の寫眞の前であつた。

その寫眞には、明治三十七年七月二日遼陽戦

死、故陸軍歩兵一等卒、森松太郎君とあつた。

杉岡青年は、護國の華と散つた勇士の前に

恭しく一體すると、

「和尚さん、僕も戦死をすれば、かうして祭

つて戴けるんですね」

信師は、その言葉に思はず目頭が熱くなつ

て、どう返事していいか分らなかつた。

「杉岡さん、あなたの武運長久を祈つて居り

ます。どうぞ御身を大切に、存分戦つ

て来て下さい」

「有り難うございます。而し和尚さん、僕の

やうなものでも、皇國の役に立つと思ひま
すと、生きて歸る考へはございません」

「……………」

「僕は決心してゐます。家内にも俺が戦死し

たら、良縁を求めて必ず嫁付くやうに言つ

て聞かせてゐます」

杉岡青年は、新婚間もない新妻の行末を考

へて、さう固く命じてゐたのだつた。

實に、何と言ふ悲烈な覺悟だらう。

信師は、生れて初めて味ふこの大きな感激

に、色んな感情が、込み合つて来て、

「杉岡君」

と言つて、力強く抱きしめたい感動に馳ら

れて行くのだつた。

おゝこゝに、祖國を護る古武士のやうな、

けなげな勇士がある。

三、山西の華と散る

赫々たる武勳に輝く鯉登部隊は、十月十五

日、山西省平定縣、地都、南方高地に據る頭

敵の掃蕩に向つた。敵は頑強に抵抗を示して

ゐた。

やがて決死隊が募られ、その中に加はつた

のは、我が杉岡上等兵だつた。

「しつかり頼むぞー」

との戦友の激勵の言葉を後に、二十二名の

決死隊は、頭上を雨と降る敵弾の中を、物と

もせず、敵陣目がけて進んで行つた。

かうして二十二名の白澤隊は、全員壯烈な

る戦死を遂げたのだつた。

杉岡上等兵の戦死の報を受けとつても父菊

太郎夫妻は、かねて覺悟の事とて、決して驚

かなかつた。

「決死隊の中に加はつて戦死したのは、本人

にとつて、これ以上の本望はございませ

ん。」

と、軍國の父は、訪ねて来た村人に語つた。

吁、護國の柱、勇譽義山居士！ 英靈よ、

永へに安らかに眠れ！

俳壇

大田耳動子



下 關 野 公 孫

ふくれ來て瀬戸の春日の渦に舞ふ

評 溢るゝやうな日の光が、瀬戸に漲つて來て渦を巻いてゐる。それが、靜かに春の舞でも舞つてゐるかのやうに。「ふくれ來て」も「渦に舞ふ」も動きのある表現である。

兵庫縣 山 本 壽 之

春宵の灯明りの障子かな

評 暮れきれることの遅い春の夕の障子に、ボツカリ灯の影が映つてゐるのを詠つたものであらう。「灯明り」がよい。之がもし「灯明るき」であつたら、當然「春の夜の」とすべきであるが、それでは、あまりに陳腐である。

米子市 宮 本 倩 子

子を抱いて犬の親子を見舞ひけり

評 「見舞ひけり」の意は、單に、訪れたとか、のぞきに來たとかいふよりも、生れて間もない、犬の親子に相當の關心を有つて、云ひ替へれば、健かであれかしと念ずる心持ちで訪れたのである。

「子を抱いて」によつて、作者の氣持

の動きがわかる。下五字の表現をよしとする。この句の季題「犬の子」は、歳事記を見てもはつきり出てゐない。大體春秋二度あるやうだが、季節成立の精神に従つて、春のものとして採用した。

東京市 鈴木 白 舟

夏に入る露の緑に竹澄みぬ

岡山縣 山 岡 峻 虎

春陰に檐栖の鳩のふくみ鳴く

弘前市 能 登 白 水

羽搏きのまたひそとして春の月

大阪府 豊 田 邦 秀

牡丹雪焚火のなかにはなやげる

東京市 新 田 眞 砂

住みかへてこの静けさに春浅き

朝鮮 崔 葉 芳 利

燈に春霖光る門くぐる

奈良縣 奥 田 楓 湖

草市のものみな濡れて夜の露

千葉縣 安 田 保 治

蜂かけて風筋光る青葉かな

飯田市 古 川 矢 繪 子

水仙のぬくき日當りつくりある

高崎大觀世音

東京市 瀧 澤 全 翁

ふるばかり大慈大悲の春の光

東京市 島 崎 榮 三

山下をめぐれる達の櫻かな

小樽市 中 村 茂 舞

寺の塔かすみ遠め彼岸かな

和歌山縣 奥 村 映 水

庭さきの柿の筆葉に春の雨

尾道市 葛 田 竹 邨

風にからき布團となりにけり

北海道 竹 岡 昇 金

木の芽ほぐるゝ眞晝の雨の雫かな

北海道 長 尾 月 松

盆梅の蕾はかたき宴かな

青森縣 佐々木 涼 湖

庫裡出でし僧老いにけり宵の雨

富山縣 藤 田 四 三 九

日の歩みこのごろおそき猫柳

大阪府 日 根 野 谷 記 三 弘

汐干符はろかに白帆二つ三つ

弘前市 安 藤 すが 江

雲低くし窓より見ゆる梅の枝に

大阪市 橋 本 花 汀

下朋を踏みて逸りぬ二歳駒

米子市 宮 本 倩 子

嬰兒の寝轉迦の顔に似たるかな

東京市 鈴木 白 舟

日にふれて金魚の口のそろひたる

大分縣 石 堂 柑 山 堂

白魚の網番しつゝ繕へる

東京市 島 崎 幸 三

鶯の鳴く木もなくて失せにけり

下關市 中 尾 碩 館

庭に來て鳴く短日の雀かな

大連市 内 藤 豊 海

岩清水とりかこみたる遍路かな

名古屋市 鷲 津 耕 順

アスファルト溶かすがとき春の雨

朝鮮 盤 江 八 年 坊

あたゝかき小縁にねむり獨り者

千葉縣 安 田 九 阜

薬瓶ふところにして霜のみち

和歌山縣 奥 村 映 水

宇治橋や鶯の音のこだまして

京都市 福 島 幸 治 郎

堤裾のイタドリ追ふて放し馬

福島縣 齋 藤 華 舟

縣境は丈餘の雪の二月かな

横濱市 石 川 良 雄

据る風呂に蛙のこゑのみちみちて

東京市 三 野 輪 江 雪

梅の花こぼれてゐたり朝の驛

大阪市 吉 廣 夏 生

病床に一日ひとり花曇り

山口縣 長 岡 見 智

初午の大鼓きこえて今日臥せり

信 仰 相 談

中村辨康師擔當……

(本欄への質問はハガキに住所氏名御明記の上信仰相談係宛のこと、誌上匿名は可)

妻帯と信仰修養

(問)

私は心の慰安と修養とを信仰に求めようと

して、目下某寺に厄介になつて居る者ですが、餘りにも世俗的な刺戟に悩まされ勝て困つて居ります。將來のことを思ひますと、信仰と家庭との生活の聯絡を何うしたらよいでせうか迷ひます。また妻帯してからの信仰修養を何うしたらよいでせうか。現世に於ける否な將來に對して何んなものでせうか。又た宗教家としたなら何んなものでせうか。私は今ま岐路に立つて困つて居ります。

(下谷・〇寺・教心)

(答)

お名前から推察しますと僧籍に入つて居られるやうですが、御尋ねの問題は先頃の天台宗の妻帯問題で刺戟を受けられたからではないのですか。何れにせよ此問題は一般

人としての、僧侶としての二つに區分して考へる必要があるやうです。天台宗のやうな戒定慧の三學を以て修養の規範とする宗旨では出家生活をしなければ本格的な佛道修行をすることが出来ませんから、その修道者たるものは妻帯しない方が本當なものでせうと存じますが、信仰を中心とする淨土教では、出家在

家の區別は勿論妻帯してもしなくても「念佛の申され易いやうに」生活することが、一番大切なことで、その他は問題にして居りませんから、あなた御自身の性格とか感情とか、意志の強弱などお考へになつて、妻帯しなくては煩悩に悩まされ勝て、却て墮落しないにも限らないと杞憂されるやうなら、むしろ妻帯なすつた方がよいでせう。若し念佛に依る修養が「妻があつては邪魔で出来ない」と云ふことになれば、萬人に通ずる宗教とは云はれません。けれども、妻があればあるまゝに、無ければない儘に、念佛修養にいそしんで行けるのが淨土教の建前ですから、それを御心配になることはまだ「念佛の信仰」に對して本當の御理解が出来て居ないからだと存じます。然し僧侶であつて見れば、一

般の信施を受けて生活して、行く身分で、自分自ら生産的な仕事に従事出来ないから、少くとも他からの信施を受けても耻かしくないだけの確信を持たねばなるまいと存じます。謂ゆる「應供者」と云ふ他人からの供養に應じ得る資格ある者としての自信あるまで、普通よりも人一倍信仰深くならなければ申

譯がたゝぬと思ひます。念佛は極めて平易な修養法ではありまするが、熱烈に信仰を求めて居る或期間は、世俗的な刺戟もへつたくれもあるものではありません。丸で氣狂ひ見たいに、恰度馬車馬が左右兩側の視野をふさがれて前の方だけしか見えなくさせられて居るやうに、自分の信仰向上のことのみに専心して他を顧みる餘裕を持ちません。無論人に依て多少の相違はありませうが、求道

信 仰 相 談

心は漸次盛んに燃えて来て、夢に見ることも寝言に云ふ言葉も信仰に關係したとばかりになつてしまひます。あなたが若し現に若い僧侶であり、將來も亦宗教家として立たねばならぬなら、先づ以てさうなるやうに専心して見て下さい。それから

後に「妻帯」のことを考へても遅くはありません。恐らく今御惱みになつて居ることも其時あなた御自身でやすくと御領解が出来てせうと思ひます。如來様が適當に教へて下さいますよ。御安心なすつて今は唯だ専心に求道して下さい。

念佛中に感ずる愉快さは

迷信なりや

問

小生は「淨土」愛讀者の一人に有之候。念

佛は寸時も缺さぬやうに努め唱へ居り候が、實に不思議のこと

もあり候。からだの弱かつ

た小生が頑強になり、段々上

司に認められる様な感じもあ

り、就中、不思議のことは一心

に念佛を唱へると、非常に愉快

になり謂ゆる朗らかな氣分に

答

念佛にいそしみ居られ候趣き誠に有難

き極みに御座候。身體の丈

夫になること、追々上司に認

めらるゝこと、念佛が愉快で朗

満たされ候が、之は或は迷信ではないかとも存ぜられてゐて此邊のこと判明せず候故、是非御高説承り度願上候。

(横手山・由里生)

らかであることなど、それは決して不思議でもなく迷信でも無之候。念佛し候ときは自然下腹にかかる力が入り、ことに木魚を叩きながら致し候ときは、右手の上下運動につれて身體全體が一定のリズムを以て動き、随つて部屋の中の空氣も一定のリズムに依て動かされ候を以て、血液の循環もよくなり呼吸も調へられ周圍と身體と互に相調和し候上に、自然精神も落着き統一狀態に導かれ候故に候。

臍下丹田に力が入ることは、仙術に謂ゆる「不老不死の金丹を練る」ものにて健康となるは當然のことに候。また念佛に依て邪念を拂ふが故に、自然に人格が高潔となり上司に認めらるゝやうに相成るべく、また身體と聲とを一定の調子と拍子とで持續させる時は自然

に精神の統一され易き狀態に誘導されるものに候が、それは尙ほ熱心に致し候時「喜」と云ふ感情と感覺とが來り候事は、必然的なものに有之候。佛教でも「七覺支」と申し「覺に至る「枝」として七つのものを數へ候が第一は「擇法覺支」とて念佛ならば念佛と云ふ一つの方法を選び取り「精進覺支」とてそれを熱心に致し候時、必ず其次ぎに「喜覺支」と云ふ喜びを覺え來り、第四に「輕安覺支」とて身も心も輕く安

らかとなり候と説かれ居り候。之は少し念佛を熱心に致し候人なれば例外なく誰でも經驗するところのものに御座候。尙宗教經驗と云ふものは色々有之到底此欄にては述べつくし難く候ゆゑ、何れまた機會を得て申し上げ可く候。

信 仰 相 談

地鎮祭に用ひる五寶

五藥、五穀、五香

問

二月號の地鎮祭と家相の中に、五寶、五藥、五穀、五香と云ふことが出て居ましたが、實は本堂建立のことがあるのでは、承知して置きたいと存じます。恐入ますが紙上にて御教示願ひます。

答

(滋賀・松尾仁海)
五寶に色々説がありますが、然し一般に通ずるものとしては、金、銀、琥珀、水精、瑠璃です。また赤銅、鐵鎗石、水精、鉛錫、白鐵を以て五似寶と稱するさうです。次に五藥とは印度の五藥が得がたいので、支那の藥草である赤箭、人參、伏苓、石菖蒲、天門冬を用ひるとの事、五穀は小麥、

大麥、稻穀、小豆、胡麻であり、五香は沈香、白檀香、丁香、鬱金香、龍腦香ですが、是等にも諸説があつて必ずしも前記のものとして居る譯でもないやうです。埋めるのも四隅及び中央の五ヶ所とも云ひ或は中央の一箇所とも申します。中央は佛座の眞下にあたるところで、それらを銅壺(瓶)に入れた五色の絲を以て結び、大日及び地天の眞言各一百遍を誦し加持して埋め、長さ五指ばかりの五色の絲(壺の蓋の上に結んだ端)を地上に出すと云ふことですが、方法としては色々なことがあり委しくは眞言宗の阿闍梨に質ねないと判りませんでせう。

う。然し淨土宗などでは洒水法に依られたらよいと存じます。信仰相談欄の問題としては

相應しくないから簡單ですが之で御ゆるし願ひます。

讀經する時の氣持

問

僧侶の方が年回の時などに讀經する心構へは(例へば佛に對してするか、死靈に對してするか、參詣者に對してするか)何うなのでせうか。また私達としてはどうしたらよいのでせうか。

答

(大阪市・工生)
科註法華經と云ふ本に法華經を讀む時の心構へが書いてあります。今ま手元にその本がないので意味だけを申しますと、先づ釋尊の代理として經を説く氣持になつてなすべきであると云ふのです。それで獅子座(佛の坐する)に坐したつもりで、一坐の

人は勿論私達の目に見ることの出来ない幾多の冥界の生類にも説法する心構へで讀經するのがよいと云ふのでした。ですが果してそれでよいのでせうか。もつと考へて見る必要はないのでせうか。さう云ふことも一分の理はあると存じますけれども、最後に「願くは此の功德を以て」と回向することになつて居りますが「此の功德」と云ふ吾が身に體驗された實際の功德が意識されて初めて「此の功德を回向する」事が出来るのでありますから、經を讀む人としては經典の中に盛られてある意味を、讀みながらよく味ひ

信 仰 相 談

つゝ反省をし認識をも深め覺悟をも新たにして自分の信仰を養つて行くべきだと考へます。それで初めて讀經に依て得たる多少の功德が認識される譯です。そしてその認識され意識されたる功德を「我がもの」とせず、志ざす靈に振り向けて、其靈の菩提(さとり)又はめざめへの向上に資すべきで、この回向の責任の上から云つても讀經する時は其經の文句のまゝに邪念なく意味を味ひつゝ水の流れるやうに我が心を推し移らしめるのがよいと考へて居ます。然し聞いて居る人の方は、前申したやうな釋尊の代人として自分達に説法して呉れて居るのだと思つて、是れ「如來の妙音説法なり」として有り難く頂戴して行くとき、意味はむづかしくて判らない乍らに、其間は心を清淨にして邪念な

く聞き得た丈でも多少の功德は認識されるから、讀む人も聞く人も共に「自他善根皆悉同向」と同向し得る丈の自信は出来る譯です。だから讀經の時の氣持としては讀む人も聞く人も自分に聞かされるのでありそしてそれを味ふことに依て今更乍らに反省して自分の修養に資する心構へが必要なのだと存じます。無論「佛」に對して讀經して居るのではありません。また死靈にも參詣人にも對して讀經して居る譯のものでもありません。聖道門的には兎に角として淨土教的には「如來の代理」と云ふやうな大それた考へで初めから「獅子座」に坐するつもりなどはいらないことです。だから讀む人の方でも「讀んで聞かせてやる」と云ふ氣持ではなく「自分に」聞かせられて居るのです。佛に花や果物を供

へるにしても事實は、自分の方へ見せるやうにお飾りするのと同じ譯です、また僧侶だから俗人だからと云ふ區別もありません。

對手になるな

問

四十二章經、第五章に佛の曰く、惡人善人を聞いて故に來りて撓亂するも、汝自ら禁息して當に瞋責することなかるべし。彼の來りて惡む者は而も自ら之を惡めばなりと云ふのがありますが如何なる意味でせうか教へて下さいお頼み申します。

答

(大和御所町 奥田藤作)
御質ねの譯文はハッキリして居ないやうですが、之を意譯して見ますと、若し惡人がことさらに來て汝が善事をなすのを快く思はずその

邪魔をし一亂すやうなことがあるつても、決して腹を立てゝはなりません。彼が來て汝を惡むのは、その人自身が惡だからであります。と云ふのでせう。國譯藏經の山上曹源師の譯に依りますと、第六章としてその終りの處を「彼の來つて惡む者は而かも自ら其身、惡なればなり」とあります。つまり善いことは善いのであり悪い事は悪いのだから、人が悪い事をしたからと云つて腹を立てゝ、あべこべに此方まで惡をなすのはつまらんではないかと云ふ意味です。禁息即ち禁じ息めさせやうと思つて、瞋責即ち瞋り責めてはならん。つまり對手になるなと云ふ事です。その具體的な例として次の章に釋尊自らの體驗談が続いてありますから、それで意味を御諒解下さるとよいと存じます。



法 語 解 説

人 格 向 上 へ の 信 仰

法 然 上 人 詠 歌

中 村 辨 康

阿彌陀佛と心は西にうつせみの

もぬけはてたる壁ぞすゝしき

—— 勅修御傳卷三十 ——

火のそばに置かれた炭

宗教信仰の極致は、全心全意を擧げて如來様に絶對依憑するにあります。

若し此事がなかつたなら、それは信仰ではありません。

どんな災難がふりかゝりませうとも、またどんな重い病氣になりませうとも、如來様におまかせして居る限り、適當に前途が開けますやうに御願ひするだけで、親船に乗つた氣持で悠々

せまらず、靜かに落着いて居られる筈のものであります。

無論「運は天にあり牡丹餅は棚にあり」と云ふやうにノホホンに構へて居てよい譯はありません。

「人事を盡くして天命を待つ」と云ふ言葉もありますやうに、出来るだけの努力はなすべきですが、それが爲めにあはてふためいてウロウロ狼狽するやうなことでは駄目です。

ウロウロすることは即ち畢竟「迷ひ」であつて、ウロウロしないところにしつかりした信仰があるからです。

ですから、宗教が科學以上であるからと云つて、病氣などに「御祈禱」をして貰つたり「おはらひ」をして貰つたり、あつちの神様を頼み、こつちの佛様を頼み、謂ゆる「瀬れる者瀬をつかむ」で迂路つき廻るなどは、信仰のない事を廣告して居る

やうなものです。誠に馬鹿氣切つて居ると思ひます。

私達の生活の中で、有限な問題に關する限りは、先づ以て「科學」の力を借りなければなりません。私達が汽車や飛行機を利用し、電氣やラヂオを利用するのは、現に科學を信じて居るからです。それを病氣に限つて醫藥醫療を信ずることが出来なくて、御祈禱や神信心に頼るなどと云ふことは愚の骨頂だと存じます。

災難にしたつてさうです。若し實際に受く可き災難なら、御祈禱したところでのがれ得る筈はありません。

「佛にも三不能あり」と云はれて居ますやうに、一切知一切能の如來様にも三つの不可能な事があると申します。

即ち「定業を轉ずること能はず」と云ふのは他の「無緣の衆生を度すること能はず、衆生界を盡すこと能はず」の二不能と共に、何うすることも出来ないものの一つです。つまり因果必然の理は嚴として動かすことの出来ない鐵則だと云ふことを物語るものです。

「定業」とは有るべく決定されたものですから、之の發現をその發現條件の整理に依て、幾分か輕くするとか、多少延期させるとかに出来ませうが、それから全然のがれると云ふことは出来ない筈のものです。

つまり佛の力を以てしても不可能な強い力（即ち業力）を喰ひ止める程の強力なものはないのです。

何うせ支拂はねばならない借金であつて見れば、むしろ進んで早く之れを解決した方が利巧でせう。

然るにそれを第三者に依頼して、簡単な御禮やお上手ぐらゐで借金から脱れようとするのは、餘りにも癡がよい、天地の大理法を無視するもので、非道德行爲として人間同志の間でさへ許されないことです。

若し宗教がそんな効用を強調するなら世の中は丸で暗闇です。百鬼夜行即ち大手を振つて惡魔が横行闊歩することになります。

本當の宗教は尊崇する者が多くなればなる程、世の中がそれだけ淨まり、それだけよりよくなつて行くものでなくてはなりませんことは云ふまでもないです。

だからそんなものは宗教ではありません。

そんな事よりも、自分の命を托し、自分の全部をまかせ切つて、本當に明るい人生を送るべき最大最強な據り所として有らねばならぬものと存じます。

然し人生を本當に明るくするには先づ「私自身」をよりよく改造してかゝらねばなりません、それは云ふべくして行ひ難

いので、不斷に如來様に接觸して、如來様の偉大なる感化に依つて、信仰深き者にならしめて頂くより外に方法がない譯です。

昔し、白樂天が鳥窠禪師に會つて佛教を尋ねたとき

諸惡莫作 衆善奉行

自淨其意 是諸佛教

と云ふ「悪いことをするな、よいことをせよ、かくの如くして自分の心を淨めて行くのが佛教なのだ」と云はれて「そんなことは三尺の童子でも知つて居ることではないか」と反問したところ

「三尺童子もよく之を知ることが出来ても、百歳の老翁がよく之をなし得ないではないか」

と云はれて赤面したと云ふ話があります。

全く百歳の老翁と云へども、自分自らの心を淨めて行くことは困難です。

然るに信仰に依つて常に如來様に自分の心が掛かつて居るならば、自然に清められて行ける譯で、それは火の傍に炭を置けば其炭が何時かしら火になつてしまふやうなものです。

大生命の中へ

私達の胸の中を割つて見れば、全くきたないものです。恐らくタドンに毛のはえたやうなものでせう。

時たま、反省して、火花を出すこともありませんとも自我心が強いから、線香花火のやうに直ぐ消えてしまひます。

思へば情けないものです。

然し信仰を得て居る限り、一たび思ひを如來様に走せれば、直ぐ心が淨まります。

線香花火と云はゞ云へ、常に如來様の方へ心に向けて心の汚れを清めて行くのは、おのづから人格を高めて行くことで、人間生活として此位貴いことはないかと思ひます。

何事も反省なくして進展はありません。

だから反省し得る者は本當に幸せです。

私達が毎日僅かに數回ではありますが、如來様を念じ、如來様照鑑の下に仕事をさせて頂いて居るのだと云ふ意識に依つて居ることは、自分の人格向上に何れだけ役立つて居るか分りません。

また私達が如來様にあこがれ、如來様の御名を唱へますとき、雑念は色々湧いて來ませうけれども、その拙い遺瀨ない心の中からも、一心になつておすがりして行く心は、よし蓮の糸のやうに細く切れ易いものではあつても、全く濁りに染まぬ清淨な

ものであり、そして一瞬の短い時間であつても、其時の心境は我身を忘れてもぬけ果てた、謂はゞ佛の心に置き替へられた清い貴いものではありませんか。

私達はもう既に如來様なしでは生きて行かないものです。

センチメンタルなやうで誠に相済みませんが、私一個人の過去現在を眺めて見ても「人生」は全く荆棘の道です。今後と雖も恐らく然様だと覺悟して居ります。之は恐らく私一人だけではありますまい。それ相當は人生を反省して見れば、十中七八位までは同じやうな苦い御經驗をお持ちだらうと存じます。

青春に富んで居る人は前途に夢があり、空想と云ふと失禮に當りますが、先づ空想に近い望みがありますから、一路邁進の元氣と若い朗らかさとがありますけれども、その元氣その朗らかさは實は苦勞を知らないウブなもので、本當に人生を噛みしめて來た人達から見たら「若い内に心ゆくまで喜んで置いた方がいいいでせう」と寧ろ同情を以て微笑んで呉れる程度のものです。

人生は青年が考へて居る程さう簡單なものではなく、また決して思ふ通りになるものではありません。

隨て人生の荒波を乗切るには、如來と共に進み如來慈光の中に働くと云ふ信仰なくしては、死ぬまで頑張り通すことは出

來ません。

また人生は富貴や名譽を得る爲めの道具ではありません。己が人格を磨き永遠の價値に生く可き爲に與へられた、實に尊く二度と得られない鍍金の道場であります。

だから此の弱い私を強くして人格改造の爲めに生き抜くには、何うしたつて如來様に護もられて居なくてはやりきれません。

如來様は私達の生命の親様です。

それは念佛する時、初めて私達に認識されて來ます。

一心に如來様にあくがれ、一心に如來様に歸命して念佛して居ますと、何時か知ら、如來様の方へ心が取られて、自分を忘れて仕舞ふ時があります。それが僅かな瞬間だとハッキリ意識に上ほつて來ませんけれども、少し持續されると「もぬけ果てた聲の涼しさ」と云ふ感じがボンヤリ乍らも意識され初めます。法然上人の此お歌の内容の深さは私達に想像出來ませんけれども、此御歌の表面の意味だけ位のことは體驗されます。

その時以來、感情的にも如來様こそは心の親様であり命の親様であることが分り、私の生々世々の親様として一切をおまかせし得る氣持にもなれますが、其處に誠にハッキリした信仰も意識される譯です。

そして自分の生命についての不安はのぞかれ、何時死んでも如來様の生命の中に歸着することが出来るのだ、そして何時死んでも幸福な如來の御胸の中に抱かれて安らかに永遠の生命を持続することが出来るのだとの絶対安心が確立されます。

絶対信頼の出来るもの

世の中に絶対信頼の出来るものがあるでせうか。

強ひて求めれば「親子」の間ぐらゐのものでせう。

親の方では子供に對して絶対信頼は出来ませんが、子供の方は先づ以て親に絶対信頼していいでせうと思ひます。

慈悲の慈は「いつくしみ」で幼児に對する親の愛です。

それにも増して一層深い愛は慈悲の悲の「かなしみ」です。

單なる「かなしみ」ではなく「いつくしみ」を含んだ「かなしみ」です。よりよく育て上げんとする遺瀾なき愛の「なげき」ころ」です。

悪ければ悪い程一層かなしく抱き上げて行く愛の心です。

之は親の心の特有なもので、本當に有り難い極みです。

それにしても人としての限りはあるものですから、いくら悲しんだところで、力の及ばないことも随分あります。

でもまづ子としては親の慈悲には絶対信頼してよい筈です。是れ以上のものは人間の中には外にありませんからです。

然るに如來の大慈悲は絶対です。親の慈愛にも増して何時でも私達をいつくしみ悲しんで居て下さいます。四十八の大悲願を以て十重二十重に私達を抱いて居て下さいます。

私達はたゞそれを知らずに居るだけなのです。恰度親の心が子が知らずに親不孝して居るやうなものです。

親不孝して居ると、親は罰を與へるところか、大いに歎き悲しんで呉れるのにも拘らず、自然に罰が當つて來ますやうに、如來様の慈悲に背いてでたらめな人生を送るなら、私達にも自然に罰が來て畢竟いい事はありません。

それに反して子供が親の心に添つて親の欲するやうに自分を磨いて行くなれば、其子供は必ず幸せになりますのと同様に、若し私達が如來様の悲願に隨順して、從來の拙ない心を放棄し念佛の信仰に置き替へ得るなれば、屹度其人の人格は高まり正しく人生に對する本當の價值を悟つて、永遠の喜びに浸ることが出来るでせう。

さればこそ法然上人も

阿彌陀佛と申すばかりをつとめて

淨土の莊嚴見るぞうれしき

と歌つて居られます。

善導大師は

此界一人念佛名 西方便有一蓮生

と「此の世界で誰れか一人如來の御名を念ずるなれば、如來の世界は清い一蓮を咲き増してその淨土を莊嚴するであらう」と云はれ、維摩經には「其心淨ければ其土淨し」と「淨土莊嚴」の原理を説いて居ります。

それは唯だ如來様を信賴するだけでよいことです。

そして其絶對信賴を表はす爲めの行爲として念佛するだけでよいのです。

念佛すればこそ心が置き替へられるのですから、自分から心を清めようの置き替へようのと心配する必要はありません。

法然上人は

阿彌陀佛といふより外は津の國の

なにはのこともあしかりぬべし

と、念佛に依て自然に亂れて居る心の聲もすつかり刈り取られて美しくなると云つて居られます。

本當に有り難い事ではありませんか。

此眞年の加減とでも云ふのでせうか、シミジミこんな事が感じられてなりません。如來様親はしきの心で一杯です。

また一方には第一線に活躍して名譽の戦傷をせられて、ペツドにあたら武勇の腕をさすつて居られる我が皇軍將士の御身の上にも想ひが走ります。

一身を 上 御一人は捧げ 奉る勇士の方々の雄々しい心は、全く念佛の信仰の心と一脉通ずるものがあると思ひます。

雨霞と飛び来る銃彈砲彈の中を物ともせず突撃また突撃する時の氣持は、正しく「我」を忘れ果てゝ居る一心不亂そのものだつたことでせう。

此體驗はまたと得られない貴い體驗で、宗教的天才が如來を念じて「我」からすつかり藻抜け果てたその宗教體驗と全然同じ精神狀態ではないかと存じます。

だから一たび戦場をくゞられた勇士は、必ず其貴い體驗を通して、通常では中々得られない高い信仰體驗へ直ぐ導かれることだと思ひます。

私達もこの勇士達にまけないやうに「不惜身命」の氣持で信仰に邁進し、自分の人格を高めて、正しい光りある人生を喜び合ひたいものです。

x

x

x

製 仰 運 動 ニ コ ー ス

各法主管長代理で

各地の病院を慰問す

問慰兵病傷

「浄土」も愈々配本開始

慰問「浄土」の應募も別項發表の如く頗る好成績にて、各地から續々と申込みが殺到して關係者一同をいたく感激せしめてゐるが、この熱誠を出来るだけ早く傷病兵士に傳へたいと、宗務所の臨時事務部と本會ではこの四月から各病院宛の配本を開始した。全國の數多い病院に配本するのだから、いくらか

部數

があつても足りない。

どうか鑽仰會員もたつた一圓で一年間民族發展の爲の尊い戦傷を負つた我々の犠牲者を心から慰問出来るのだから、出来るだけ慰問「浄土」の聖業に應募して頂きたい。規定は別に定めてありませんが、念の爲に別項に記載しましたから御参照下さい。尙、浄土

宗では「浄土」による慰問の外、各地の病院に各本山法主を管長代理とし派遣し懇切な慰問の辭を呈せしめてゐる。既に關西方面は各法主が老軀をさへげて一々病院を歴訪せられたが、戦傷兵士は感涙にむせんで喜んだ、東北地方も五月に増上寺法主が巡歴せられる事に確定してゐるが、これまた感激の幾場面を展開することであらう、かく浄土宗では舉宗一致の體制で傷病兵慰問に大童の活躍中である。

例會に勤しむ

直行寺支部

北海道小樽市直行寺支部では支部結成以來支部協力して着々支部強化に努めてゐるが、更に新

らしく別動隊として淨友會を結成して毎月例會を開き、益々活潑な運動を展開してゐる。メンバーも會社員、教員、商人、職人等變化に富みしかも貴賤老若を問はずお互に胸襟を開いて語り合ふ有様で、法然上人鑽仰の會にふさはしい會合を續けてゐる。

貞恭支部例會

東京の貞恭支部では四月九日午後二時より芝の明照會館で例會を開き、佐藤賢順氏より「般若心經」の講義を聴いた。

私達の傷病兵士を
浄土で慰めませう

目下募集中の「慰問
「浄土」に應募下さい

只今浄土宗務所内臨時事務部で慰問用の「浄土」を募集してゐます金一圓也を御送り下さい傷病兵士れば一ヶ年間「浄土」が傷病兵士の許に届けられます。心から慰めるには「浄土」が最適です。どうか私達の尊い犠牲者の爲にどうか御申込み下さい。念の爲に御送金先を左に明記します。東京市芝區芝公園地浄土宗務所内臨時事務部宛

會 員 の 声

奈良・辻 虎次郎

恐懼合掌稱名しつゝ謹みて御禮の御挨拶申上候

時下春色今や酣にして百花撩亂と咲き誇り小鳥囀る聲もいと和やかに聞え愛らしき胡蝶も婉舞の曲に人々の眼を樂ませる頃と相成り申候誠に楚々たる春の陽は清朗明徹麗らかなる旭光を浴びてほんのりとした春霞に霞みきつた野山の空氣を吸ひ田園にいそむ情緒は宛ら詩的の感想に御座候さて毎々洵に結構なる浄土御届け被下全面を通じて毎週颯爽たる雅趣味豊かな體裁と情味津々として盡きせぬ信仰精神を背景としたる盛源山な内容には只管敬慕と崇拝只々感謝と感激の渦に附捲致され申候

就きましては既刊號に於て文壇の巨人吉田絃二郎先生の玉稿はいつも有難く拜讀の榮に浴し申し僞らざる人間性の純情を遺憾なくその蘊蓄を傾けさせられ勢なからぬ浄土愛讀者に好印象を與へられし事と存じ候其他の御執筆欄もいづれも粒々御丹精覃めさせられし編輯部の人知れぬ尊とき血汐を流されある事を深く感謝申上候何卒今後共に一層健實なる好讀物を精々御掲載御集録以つて眞實法然上人鑽仰の精神に勇往邁進遊されん事茲に聊か蕪辭を申述べ我が愛する浄土を渴仰の餘蘊禁じ難く茲に思ひの臨慮心坦懷に自己の衷情を披瀝させて頂き申候不遜寛容給はり度末筆ながら編輯部先生一同御法體御大切の程偏に念じ上げ名残惜しき擲筆申上候 敬白

病院慰問用「浄土」

寄贈者芳名(第二回)

二十圓也	滿洲大連、明照寺	明照寺人會殿	一圓也	香川、宇多津町	淨泉寺殿	壹圓也	和歌山海草郡安原村	觀音寺殿	壹圓參拾錢	靜岡北豆組	蓮光寺殿
二十圓也	同 大連、同	淨友會殿	二圓也	同 同	同 念寺殿	二圓也	同 同	同 同	八圓也	和歌山教區日高組	八寺殿
十圓也	愛媛、松前町	大智院、大念寺殿	一圓也	奈良、吉野町	如意輪寺殿	一圓也	滋賀、大津市	成覺寺殿	壹圓也	鹿兒島縣內三浦町	女忠寺殿
二圓也	青森、田名邊町	常念寺殿	一圓也	愛媛、上灘町	本覺寺殿	壹圓也	奈良教區	第三組十九ヶ寺院殿	壹圓也	青森東組	正經寺殿
二圓也	群馬、太田町	長念寺殿	一圓也	滿洲、撫順	撫順淨土教會所殿	壹圓也	香川宇多津町	淨泉寺殿	壹圓也	群馬太田組	正龍寺殿
一圓也	大阪府豐能郡登野村	阿彌陀寺殿	一圓也	鳥取	阿彌陀寺殿	壹圓也	出雲教區羅川組	大念寺殿	壹圓也	群馬太田組	西福寺殿
一圓也	德島、脇町	東林寺殿	一圓也	愛媛、長濱町	阿彌陀寺殿	壹圓也	同 同	神門寺殿	壹圓也	同 同	愛樂寺殿
一圓也	京都市京極組	長春寺殿	三十圓也	三河教區豐橋組	二十ヶ寺院殿	貳圓也	大阪市天王寺區勝山通	淨信寺殿	貳圓也	同 同	正源寺殿
三圓也	同	大雲院殿	內譯	三河、悟真寺、二圓、普仙寺、西禪寺、清源寺、一圓、龍興寺、太蓮寺	香福寺、法香院、榮昌寺、專願寺、高林寺、觀音寺、樹松院、法福院、東高院、全宗軒、善忠院、竹意軒、專福軒、龍興院	貳圓也	愛媛越知郡岩城村	淨光寺殿	壹圓也	同 同	正源寺殿
三圓也	同	淨教寺殿	一圓也	同 同	同 同	壹圓也	北海道上磯郡知內村	順故庵殿	壹圓也	同 同	了源寺殿
三圓也	同	本覺寺殿	一圓也	同 同	同 同	壹圓也	四國讚岐東讚郡	淨智寺殿	壹圓也	同 同	法信寺殿
三圓也	同	勝圓寺殿	一圓也	同 同	同 同	壹圓也	同 同	善光寺殿	壹圓也	同 同	東源寺殿
二圓也	同	法然寺殿	一圓也	同 同	同 同	壹圓也	同 同	善光寺殿	壹圓也	同 同	正源寺殿
二圓也	同	空也寺殿	一圓也	同 同	同 同	壹圓也	同 同	善光寺殿	壹圓也	同 同	正源寺殿
二圓也	同	永養寺殿	三十圓也	長崎、嚴原町	修善院殿	貳圓也	石見教區那賀組	專福寺殿	壹圓也	同 同	正源寺殿
二圓也	同	淨國寺殿	五圓也	東京、本郷東片町	楠木樂榮殿	參圓也	青森市	正覺寺殿	壹圓也	同 同	正源寺殿
二圓也	同	淨運寺殿	一圓也	愛媛、越知郡岩城村	淨光寺殿	參圓也	和歌山海草郡安原村	觀音寺殿	壹圓也	同 同	正源寺殿
二圓也	同	上德寺殿	一圓也	北海道上磯郡知內村	順故庵殿	壹圓也	同 同	西念寺殿	壹圓也	同 同	正源寺殿
二圓也	同	新善光寺殿	二圓也	南海教區讀鞍組東讀部	淨願寺殿	壹圓也	德島縣牟岐町	成覺寺殿	壹圓也	同 同	正源寺殿
二圓也	同	天性寺殿	二圓也	同 同	同 同	壹圓也	同 同	成覺寺殿	壹圓也	同 同	正源寺殿
二圓也	同	德島、富岡町	一圓也	同 同	同 同	壹圓也	同 同	成覺寺殿	壹圓也	同 同	正源寺殿
三圓也	小樽市	直行寺、淨友會、婦人會殿	一圓也	同 同	同 同	壹圓也	同 同	成覺寺殿	壹圓也	同 同	正源寺殿
三圓也	北海道、古平町	顯雄寺殿	一圓也	同 同	同 同	壹圓也	同 同	成覺寺殿	壹圓也	同 同	正源寺殿
一圓四十錢也	愛知、西加茂郡小原村	西雲寺殿	一圓也	同 同	同 同	壹圓也	同 同	成覺寺殿	壹圓也	同 同	正源寺殿
六十錢也	同	安養寺殿	一圓也	同 同	同 同	壹圓也	同 同	成覺寺殿	壹圓也	同 同	正源寺殿
五圓也	岐阜、不破郡宇留野村	安養寺殿	一圓也	同 同	同 同	壹圓也	同 同	成覺寺殿	壹圓也	同 同	正源寺殿

編輯後記

◆創刊以來滿三ヶ年——思へば

去年の同じ日に滿二ヶ年の感慨をこの所に述べて早や一年を経過してゐる。夢の様な年月である。

◆發刊以來卷を重ねること四卷、號を積むこと三十七號、其の間に山あり谷あり大河あつて、それ相當の苦勞を重ねて來た。が、過去を振りかへつて、感慨にふけるのは未だ早い。道はこれからである。征途尙遠し。一そう頑張らねばならない。

◆今月に入つて我が戰時體制は凡ゆる方面に愈本格的に形造られて行く。既に「覺悟」の時期ではなく長期戰方策實施の時期である。平常の信念を日常に實行して行かねばならない時である。大言壯語よりも實行である。われわれも勤めやう。

◆先月遂ひに御病氣のために

御寄稿願へなかつた吉田絃二郎氏が今月は再び筆を執つて氏獨特の境地を美しい隨筆に託して御贈り下さつたことは、氏の御病氣の御全快と共に私共の最も喜ばしい事の一つである。

◆佐藤春夫氏は久し振りで卷頭にその英姿を現はされ、事變下に於て國民の考へねばならぬ重要な問題を示された。目下各方面に御多忙中にも不拘この御厚意は感謝の外はない。

◆昨年九月號でその前篇完結を見た飯田光明氏の「佳運と安樂」の後篇は多數讀者の御希望もあり作者の構想も成つたので今月から「血しぶきの法將」と題して數回連續で掲載することになりました。前篇より更に波瀾に飛んだ繪卷が次々にくり展げられて行くことでせう。何卒御期待下さい。

◆講談の一龍齋貞丈師、讀物に小島健三氏と新進をそろへて一層

讀物陣の強化を試みました。また、國際事情解説、一頁評論の欄を設けたのも、一つの試みです。御批評を願ひます。

◆信仰相談欄に就てですが最近頼みに質問數が増加して、残らず御返事申してゐては、全紙を費しても間に合はない有様なので、極く眞面目な、且つ一般に信仰のため有益なものに多く回答するやうに致したい方針ですから、讀者も氣まぐれでない、有意義な質問によつて、本欄の充實を心掛けて下さるやう願ひします。

◆傷病兵慰問の淨土募集も全國からの御應募、御支援によつて、見事な成績を擧げておりますことは別項記載の通りであります。この調子では週日ならずして豫定額に達する見込みですが、これを大々的に突破するやう一更御援助をお願いします。

淨土 五月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和三年四月十日印刷納本
昭和三年五月一日發行

(定價十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人 赤尾 光雄
印刷所 大日本印刷株式會社
東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
發行所 法然上人續仰會
東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢

(送料一錢)

一ヶ年 金一圓

(送料不要)

右の一ヶ年金壹圓は法然上人續仰會の會費です。入會御申込みと同時に一圓御收めになれば、「淨土」が一ヶ年間購讀できます。

絶好の

布教用書

法語例

(一七) わが浄土をたつる心は凡夫の報土にむ(生)まるゝことをしめさんがためなり。

(二〇九) 酒飲むは罪にて候か。答。まことには飲むべくもなけれども。この世のならひ。

(二一五) 子産みて神佛へまいる事百日はばかりと申候はまことにて候か。

答。それも佛法にはいま(忌)す。

(二二四) 出家は若きと老いたるといづれが功德にて候。老いては功德ばかりえ候。若きはなをめでたく候。

私たち
の今なやんでゐる問題を法然上人は己に八百年の昔に悩んでおられた。そして迷信的、偶像的宗教の是正改革を叫んだのが祖師であつた。

西にルーテル東に法然と稱せらるゝ所以である。法然上人の句々言々悉く時代への關心が波うつてゐる。

本書整備内容 (藤井實應編)

○道を求む ○新しき救ひの道 ○本尊 ○安心 ○念佛
○生活 ○社會 ○和歌 ○法然上人の略傳

法然上人法語抄

定價 三十六錢
送料共

クロース装
菊半截一三〇頁

發行所

法然上人讃仰會

中村 辨康 著

法然上人の信仰生活

國民精神力の緊張が最も必要とされるこの秋に萬人を等しく迎へ入れるこの専修念佛の扉を通じて確固たる宗教的信念を擲んで下さい。

法然上人が時代の悩みを一身に背負つて歩まれた求道の跡こそ正しい信仰への大道です。

★筆を上人の御誕生に起して、精誠をつからしめて求道に邁進せられた青年期、一宗を樹立せられる迄の波瀾に富んだ、御生涯死後の迫害等に到るまで興味深い筆致で描かれてゐるので、知らず知らずの中に信仰の三昧に引き込まれる。★

目次

- 第一 求道生活——第一期求道生活——求道の動機、恩誓の被方へ、菩提寺での生活、上洛の道すがら。第二期の求道生活——叡山の出家生活、功德院の學問生活。第三期の求道生活——讀書三昧の生活、叡山上人との接觸。第四期の求道生活——碩學歴訪の旅。第五期の求道生活——再び讀書生活へ。
- 第二 信仰生活——入信時代の新生活——強い自己反省、萬人を含む人間反省、開宗の根底。二開宗時代の生活——山を下つて京の町へ。三専修念佛の生活——信仰を萬人の胸へ、集つて来るあらゆる階級、偉大なる人格の力、大原勝林院の信仰問答、全佛教の再認識。四迫害受難の生活——三十年氣が付かなかつた恨み、具體化して來た迫害、弟子の罪を負ふて、逆縁を順縁と見る、死生を超へた信仰の力、配所から再び京へ、死後まで續けられた迫害、宗教の極致。法然上人年表

四六版一三〇頁
總ふり假名付
二色刷優雅表紙付
送料共 價 三十六錢

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十三年四月廿日印刷納本
昭和十三年五月一日發行

淨土 第四卷 第五號

定價 金十錢（送料一錢）
外埠定價 金十一錢

發行所 法然上人鑽仰會 東京市芝區芝公園明照會館
編輯 東京市芝區芝公園明照會館